

ペロポネソス戦争末期史料集

高 畠 純 夫

凡 例

一、以下はペロポネソス戦争末期に関する史料、具体的には、(1) クセノフォンの『ヘレニカ』第1巻第1章1～第2巻第3章10、(2) オクシユリンコス・パピュルスの『ヘレニカ』のうち当該時期に関わるカイロ・パピュルスとフィレンツェ・パピュルスの断片、(3) テオポンボスの『ヘレニカ』の断片のうち当該時期に関わる4断片と当該時期について参考になると思われる1断片、以上3種類の史料の翻訳である。

一、底本としたのは、(1) については E.C. Marchant, *Xenophontis Opera Omnia*, tomus 1, Oxford, 1900、(2) については P.C. McKechnie & S.J. Kern, *Hellenica Oxyrhynchia*, Warminster, 1988、(3) については F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker*, Leiden, 1986, 115 F6-8 である。

一、訳をつくる上に参照した主要なものは、(1) については P. Krenz, *Xenophon Hellenika I - II.3.10*, Warminster, 1989 と根本英世訳クセノポン『ギリシア史』1、京都大学学術出版会、1998、(2) については I.A.F. Bruce, *An Historical Commentary on the Hellenica Oxyrhynchia*, Cambridge, 1967、(3) については *FGrH* の Kommentar である。

一、クセノフォンについてはきちんとした邦訳があるにもかかわらず、独自の訳をつくった目的は、ペロポネソス戦争末期の状況を知るにはこれら関連史料の逐語的検討が必要と考えたからである。したがって、その成果である註解の掲載が本研究の最終目標となる。しかし、それについては、採用した読みについての註も含めて、枚数の関係から次号以降の掲載を目指すこととする。本号には構成を見通せる表のみを載せた。

クセノフォンの『ヘレニカ』

第1巻

第1章

1 その後、何日も経ぬうちにテュモカレスが少数の艦隊を率いてアテナイからやって来た。そしてすぐにラケダイモン人とアテナイ人は再び戦闘に入り、アゲサンドリダスに率いられたラケダイモン人が勝利した。

2 その後しばらくして、冬の初めに、ディアゴラスの子ドリエウスがロドスから14隻の船を率いて航行し、夜明と共にヘレスポントスへ入った。それを見たアテナイの監視兵は將軍たちに合図を送った。將軍たちが彼に向けて20隻の船を出航させると、ドリエウスは陸側へと逃げ、隊形を開きつつ、ロイテイオンの辺りに自らの艦船を陸揚げしようとした。

3 アテナイ軍が近づくと船と陸とから戦いを始め、ついにはアテナイ軍は何もなしえずマデュトスの別の基地へと航行していった。

4 ミンダロスはイリオンでアテナ女神に犠牲を捧げている時にこの戦いを見ると、ドリエウスを助けようと海へと走り、自分の三段櫓船を出航させ、ドリエウスの船を救出しようとした。

5 アテナイ側はこれに対抗して船を出し、アビュドスの辺りで海岸沿いに早朝から夕刻まで戦った。そして勝ったり負けたりしていたところに、アルキビアデスが18隻の船を率いてやって来た。6 そのため、ペロポネソス側のアビュドスに向けての逃走が起こったが、ファルナバズがこれに加勢に駆けつけ騎乗したまま海に入れるところまで入って戦い、麾下の騎兵と歩兵を励ましていた。7 ペロポネソス側は船を密集させて、海岸に沿って列をなすようにして戦った。アテナイ側は、乗員のいない敵艦30隻および自分たちの失った船とを押収すると、セストスへと運び去った。

8 そこから40隻を除いて全艦船がそれぞれ集金のため、ヘレスポントスの外に出て行った。そして將軍の1人トラシュロスは、このことを報告し、兵士と船を要請するためアテナイへと航行した。

9 その後、ティッサフェルネスがヘレスポントスにやって来た。アルキビアデスは彼のもとを1隻の船で訪れ、友好の贈り物を差し出したが、ティッサフェルネスは彼を捕らえると、サルデイスに幽閉してしまった。ティッサフェルネスの言い分は、大王がアテナイ人と戦うよう命じているということであった。10 しかし、30日後、アルキビアデスはカリアで捕まったマンティテオスと共に馬を調達し、夜陰に乗じてクラゾメナイへと逃走した。

11 セストスにあったアテナイ軍は、ミンダロスが60隻の船をもって自分たちに向かおうとしていることを知ると、夜陰に乗じてカルディアへと逃れた。そこへアルキビアデスもクラゾメナイから5隻の三段櫓船と1隻の軽装船と共にやってきた。ペロポネソス側の船がアビュドスからキュジコスへ向けて出航したことを知ると、アルキビアデスは自らは歩いてセストスへ行き、船の方はその地に回航するよう命じた。12 艦船が到着し、海戦をなすべく彼が出航しようとしている時、テラメネスが20隻を率いてマケドニアから、また同時にトラシュブロスが20隻を率いてタソスから、やって来た。両者とも金を集めてきたのだった。13 アルキビアデスは彼らに主帆を取り外して自分に従うよう言うと、パリオンへと航行した。パリオンに集まった船は全部で86隻となり、次の夜には出航し、明けて翌日の朝餉時にプロコネソスに着いた。14 そこで彼らは、ミンダロスがキュジコスにいるが、歩兵を率いたファルナバズもそこにいることを知った。そこでその日はその地に留まり、次の日アルキビアデスは集会を開いて、もはや海戦も陸戦も城壁戦も避けられぬと告げた。「われわれには金がないが」と彼は説明した、「敵には大王からの无尽蔵の金があるからだ。」15 その前の日には、彼らが投錨した際に、彼はすべての船を小さなものに至るまで自分の下に集め、敵に船の数を知らせぬよう、対岸に渡るところを捕まえられた者は、罰として死刑に処すると宣告した。

16 集会後、海戦の準備をしてキュジコスへ向けて大雨の中出航した。キュジコスに近づいた頃、空が晴れわたり陽が差してきたため、ミンダロ

ス麾下の船が港を遠く離れて訓練をしており、60隻が彼から引き離されているのが見て取れた。17 ペロポネソス側は、アテナイ側の三段櫓船が以前よりはるかに多くなり、港の近くにいるのを見て、陸地へと退避した。そしてまとまって投錨すると、漕ぎ寄せてくる敵と戦い始めた。

18 一方、アルキビアデスの方は艦船の20隻を率いて回航すると、上陸した。ミンダロスはこれを見ると、自分も上陸して戦ったが、戦死してしまった。彼に従っていた者たちは逃げ去った。アテナイ人はシュラクサイ人の船を除くすべての船を曳航してプロコネソスへ行った。シュラクサイの船はシュラクサイ人自身が焼いてしまったのである。つぎの日アテナイ人はそこからキュジコスへと航行した。

19 キュジコス人は、ペロポネソス軍とファルナバズスが国から立ち去ったため、アテナイ人を受け入れた。20 アルキビアデスはそこに20日間留まり、多額の金をキュジコス人から集めたが、この国にそれ以上の悪行を加えることはなくプロコネソスへ立ち去った。そこからペリントスとセリュンブリアへと航行した。21 ペリントス人は軍を町の中に受け入れたが、セリュンブリア人は軍を受け入れず、金を供出した。

22 そこから今度はカルケドニアのクリュソポリスへ行き、その地を要塞化し、そこに税関デカテリオンを設けて10分の1税を黒海から来る船から徴収し始めた。そして、守備隊として30隻の船と2人の将軍テラメネスとエウマコスを残して、その地と出て行く船とに注意を払い、その他可能なやり方で敵に打撃を与えるように計らってから、去った。その他の将軍たちはヘレスポントスへと向かった。

23 ミンダロスの副提督であるヒッポクラテスからラケダイモンへ送られた書簡がアテナイ側の手に落ち、アテナイへ送られた。そこには次のように書かれていた。「材木（＝船）は流失、ミンダロスは走り去り（＝戦死）、人々は飢えている。われわれは茫然自失して何をなすべきかわからない状態。」

24 一方、ファルナバズスは、全ペロポネソス軍兵士と同盟国軍兵士を励まして、身体が安全である限り、材木のことで気を落とすことはない、

帝国にはたくさんあるのだから、と言って、各人に外套と2ヶ月分の援助金を与えた。そして、水兵を重武装させ守備兵として自らの沿岸地帯に配置した。25 また、諸国家から將軍たちと三段櫓船を呼び集め、各人が失った数の三段櫓船をアンタンドロスで建造するよう命じた。そして金を与えて、木材をイダ山から運ぶよう言った。26 艦船建造中にシュラクサイ人はアンタンドロス人と共に城壁のいくらかを完成させ、防衛業務においても多くの者の中でもっとも喜ばれた。そのために今もシュラクサイ人はアンタンドロスにおいて恩恵者の称号と市民権とを有している。ファルナパズはこうしたことを整えると、ただちにカルケドンへ援軍に赴いた。

27 この時、シュラクサイ人將軍のもとに祖国から、諸君らは民衆によって追放された、との知らせが届いた。そこで將軍たちは自分たちの兵を呼び集め、ヘルモクラテスが皆の前で告げ知らせ、自分たち全員が法に反して不正に追放された、と自らの不幸を嘆いた。そして、以前同様今後とも立派な人物として命令を遂行して欲しいと訴えかけ、自分たちの代わりに選ばれた者たちが到着するまでの指揮官を選ぶよう命じた。28

兵士たち、とりわけ三段櫓船長、乗船戦闘員、操舵長は、彼らに指揮をとって欲しいと叫び声を上げた。しかし、將軍たちは自らの祖国に抵抗すべきではない、と言い、さらにもし誰かが自分たちを非難しようというのなら、弁明の機会を与えてくれるべきである、と言った。そして思い出して欲しい、と続けた、「どれほどの海戦を諸君らは自分の力で戦ったか、どれほどの船を獲得したか、われわれの指揮下で他の同盟国と共に諸君はどれほど不敗を誇ったか、それもわれわれの力量と諸君らの熱意があったが故に陸でも海でも最強の戦列を擁したためではないか。」29 非難を持ち出す者は誰もおらず、要望により交代の將軍であるエピキュデスの子デマルコス、メネクラテスの子ミュスコン、グノシアスの子ポタミスが到着するまで彼らは留まった。三段櫓船長のほとんどが、シュラクサイに戻った際は彼らと呼び戻すことを誓い、全員を誉め称えた上で望むところに送り出した。

30 個人的にヘルモクラテスとつき合っていた者たちは、彼の気遣い、熱情、気さくさをひどく懐かしんだ。というのは、彼は知り合った三段櫓船長、操舵長、乗船戦闘員の中の有能な者たちを毎日朝と夕とに自分の陣屋に呼び集めては、今後何を言い何をなすかを相談し、彼らにその場であるいは熟考してから意見を言うよう求めた上で説明するのを常としていたからである。31 そのためにヘルモクラテスは会議において最善の発言者、助言者と思われ、非常に尊重されていた。スパルタでティッサフェルネスを非難すると、アステュオコスが証人となり、真実を話していると思われたし、ファルナバズスのもとに行くと、頼むよりも前に金を差し出されてシュラクサイ帰還のための外人部隊と三段櫓船を用意できた。そうしている間に、後任のシュラクサイ人将軍がミレトスにやって来、艦船と軍隊とを引き継いだ。

32 この時と同じころ、タソスで内乱が生じ、親スパルタ派の者たちとスパルタの統治官エテオニコスが追放された。このことを起こしたとしてスパルタ人パシッピダスはティッサフェルネスと共に責任を問われ、スパルタから追放された。この者が同盟国から集めた艦船は、クラテシッピダスが派遣され、キオスで引き継いだ。

33 このころ、トラシュロスがアテナイにいた時、アギスがデケレイアから出て掠奪を繰り返しながら、アテナイ人の壁それ自体にまで至ったことがあった。トラシュロスはアテナイ人と町にいたその他の者たちを率いて出撃し、敵たちが進軍してきた際は戦うべく、リュケイオンの体育練習場で隊列を整えた。34 これを見るとアギスは素早く引き返したが、殿軍の中の数人が軽装兵によって殺された。このためアテナイ人はトラシュロスが求めてきたものについて一層熱心になり、彼が1千の重装兵と100の騎兵、50隻の三段櫓船を登録することを投票決議した。35 アギスは穀物を積んだ多くの船がペイライエウスにやって来るのをデケレイアから見ると、穀物が海路やって来る源の地をも押さえるのであれば、自分の軍が既に長期間アテナイ人を土地から閉め出していることも何の役にも立たない、と言った。また、ピュザンティオンのプロクセノスである

ランフィアスの子クレアルコスをカルケドンとビュザンティオンへ派遣するのが最も良からう、と言った。 36 この提案が決定されると、メガラとその他の同盟国からの人間を15隻の船に——快速船よりもむしろ兵員運搬船に——乗り込ませ、クレアルコスは出発した。彼のこの船のうち3隻は、ヘレスポントスで船を常時見張っていた9隻のアテナイ船によって破壊されたが、その他はセストスへ逃れ、そこからビュザンティオンに無事着いた。

37 そして、この年は終わった。〔この年にはカルタゴ人がハンニバルに率いられて10万の軍勢でシケリアへ遠征し、3ヶ月の間に2つのギリシア人国家、セリヌスとヒメラを占領するということがあった。〕

第2章

1 翌年〔この年には第93回オリンピック競技会が開かれ、この年追加された2頭立て戦車競技でエリス人エウアゴラスが、1スタディオン競争でキュレネ人エウボタスが勝利し、スパルタではエウアルキッポスが監督官、アテナイではエウクテモンがアルコンであった〕、アテナイ人はトリコスを要塞化し、トラシュロスは投票決議された船を与えられると、水兵5千人のために楫を作り、彼らを同時に軽装投擲兵に出来るようにした上、夏の初めにサモスに向けて出航した。

2 そこに3日間留まった後、ピュゲラへ航行した。そこで土地を荒らし、城壁に攻撃をしかけた。するとミレトスからピュゲラ人への援軍が何人か駆けつけ、散開していたアテナイ人軽装兵を追跡し始めた。 3 軽装投擲兵と重装兵2分隊が味方の軽装兵の応援に駆けつけ、少数を除いてミレトスからの援軍のすべてを殺し、およそ200の楫を捕獲し、戦勝碑を建てた。

4 次の日、ノティオンへ航行し、そこで装備を整えるとコロフォンへと進んだ。コロフォン人は味方についた。そして続く夜、穀物の収穫期を迎えたリュディアへ侵入し、多くの村を焼き払い、金と捕虜とその他多くの掠奪品を獲得した。 5 ペルシア人スタゲスがこの地にいたが、アテ

ナイ軍兵士が陣営から散開して自分のための掠奪品を求めている際に、騎兵が応援に来たにもかかわらず、1人を生きたまま捕まえ、7人を殺した。

6 その後、トラシュロスは軍を率いて海へと行き、エフェソスへ航行しようとした。ティッサフェルネスはこの企てを知ると、多くの兵を集め、騎兵を送り出して、全員にエフェソスにアルテミスを助けに行けと伝えさせた。

7 一方トラシュロスは、侵入後17日目にエフェソスへ向けて出航し、重装兵はコレッソスの近くに、騎兵と軽装投擲兵、乗船戦闘員およびその他全員は町の向かい側の沼地に、それぞれ上陸させ、夜明と同時に2部隊を率いて出発した。8 この時エフェソス側に立って戦ったのは、町から出たエフェソス人のほか、ティッサフェルネスが率いていた同盟国軍、以前からの20隻、別の機会に来た5隻——2人の将軍、ヒッポンの子エウクレスとアリストゲネスの子ヘラクレイデスが率いてやって来て、その時そこにいた——からのシュラクサイ人、および2隻からのセリヌス人であった。9 彼ら全員はまずコレッソスの重装兵と対戦した。この重装兵を打ち破って、その約100人を殺し、海まで追撃した後、今度は沼地あたりの敵兵に向きを変えた。そこでもアテナイ兵は敗走し、約300人が殺された。10 エフェソス人はそこに戦勝碑を建て、もう一つをコレッソスに建てた。シュラクサイ人とセリヌス人は最高の武勇を発揮したため、集団としても個人としても多くの者に武勲の賞を与え、望む者にはいつでも免税特権を持って居住する権利を与えることとした。さらにセリヌス人には、国家が壊滅してしまったため、市民権を与えることとした。

11 アテナイ人は休戦協定を結んで遺体を収容すると、ノティオンへと航行し、そこで遺体を埋葬すると直ちにレスボスとヘレスポントスへと向かった。12 レスボスのメテュムナで停泊中、エフェソスから出たシュラクサイ艦隊25隻を目撃した。それらに向けて船を出すと、4隻をその乗員と共に捕獲し、その他は追走してエフェソスへ追い返した。13 トラシュロスはその他の捕虜は皆アテナイに送ったが、アテナイ人アルキビアデス——アルキビアデスの従兄弟と一緒に亡命していた人物で

あるが——だけは石打刑に処した。それからセストスにいた他の遠征軍の下に航行し、そこから全遠征軍はランプサコスへと渡った。

14 冬が来つつあった。この冬の間に、捕まったシュラクサイ人は、ペライエウスの石切場に閉じ込められていたが、岩に穴を穿って夜の間に逃亡し、ある者はデケレイアへ、ある者はメガラへ逃げた。

15 ランプサコスでは、アルキビアデスが遠征軍全体をひとつにまとめようとしたが、古くからの兵士はトラシュロスと共に来た兵士たちとひとつにされることを望まなかった。自分たちは不敗を誇っているが、彼らは打ち破られてやって来たではないか、というのである。しかし、全兵士はその地でランプサコスを要塞化しつつ冬を越すこととした。16 彼らはアビュドスへ遠征もした。ファルナバズスは、多数の騎兵と共に援軍に来たが、戦いに敗れ逃走した。アルキビアデスは騎兵とメナンドロス配下の120人の重装兵を率いて、夜の闇がそれを妨げるまで追撃した。

17 この戦闘の結果、兵士たちは自分から進んでひとつとなるようになり、トラシュロスと一緒に兵を受け入れることとなった。冬の間にこの他にも何回か内陸へ遠征に出かけ、大王の土地を荒らした。

18 同じ時期、スパルタ人は、反乱してマレアからコリュファションへと逃げたヘイロータイを、協定を結んだ上自由にした。また同じ頃、トラキニアのヘラクレイアでも、敵オイタイア人に対し全市を挙げて蜂起している際に、アカイア人が移住者たちを欺し、そのため移住者のおよそ700人がスパルタの統治官ラボタスも含めて殺されることとなった。

19 そして、この年は終わったが、この年にはペルシア大王ダレイオスに反乱したメディア人が再び大王に屈服するということがあった。

第3章

1 翌年にはフォカイアのアテナ女神神殿に雷が落ち、炎上した。冬が去り、パンタクレスが監督官に、アンティゲネスがアルコンとなった年、春が始まると、戦争は22年を経過していたが、アテナイ軍は全軍を挙げてプロコネソスへと航行した。

2 そこからカルケドンとビュザンティオンを攻撃したが、カルケドンのあたりに陣を構えた。カルケドン人はアテナイ軍が進軍してくるのに気づくと、掠奪の対象になりそうなものはすべて、隣国人であるビテュニアのトラキア人のもとに預けた。3 アルキビアデスは少数の重装歩兵と騎兵をまとめると、船に沿岸を航行するよう命じた上、ビテュニア人のもとに行き、カルケドン人の財産を返すように求めた。さもなければ戦争だ、と彼らに告げ、彼らは返還した。4 アルキビアデスは、ビテュニア人と協定を取り交わすと掠奪品を持って陣に戻り、全軍を挙げてカルケドンを、海から海まで、川も出来る限りのところまで木の柵で封鎖しようとした。5 そこにスパルタの統治官であるヒッポクラテスが、戦うために町から兵を率いて出て来た。アテナイ軍は彼に対して戦列を組んだが、他方、ファルナバゾスが柵の外に歩兵と多くの騎兵を率いて援軍にやってきた。6 ヒッポクラテスとトラシュロスは互いに重装兵を率いて長く戦ったが、最後になってアルキビアデスがいくらかの重装兵と騎兵を率いて援軍にやってきた。そしてヒッポクラテスは戦死し、彼の率いていた軍は町へと逃げた。7 同じ頃ファルナバゾスは、川と柵とが接近して道が狭くなっていたためにヒッポクラテスと合流できず、陣を置いていたカルケドンのヘラクレス神殿へと退却した。

8 その後、アルキビアデスはヘレスポントスとケルソネソスへと赴き金を徴収した。残った将軍たちはファルナバゾスとカルケドンについて、ファルナバゾスはアテナイ人に20タラントンを支払い、アテナイ人の使節を大王のもとへ導くという合意に達した。9 さらに、カルケドン人はアテナイ人に対して彼らがかつて支払っていただけの貢租を支払い、負債となっている金を返す、他方、アテナイ人は大王のもとから使節が帰るまでカルケドン人に戦争をしかけないという誓いを、ファルナバゾスと取り交わした。10 アルキビアデスはこの誓いの場には居合わせず、セリュンブリアのあたりにいた。この地を占拠すると、ケルソネソス軍全軍とトラキアからの歩兵および300騎以上の騎兵とを率いて、ビュザンティオンへと向かった。11 ファルナバゾスはアルキビアデスもまた誓

いをなすべきだと考え、ビュザンティオンから彼が戻ってくるのをカルケドンで待っていた。アルキビアデスは戻ってくると、君が僕に誓わぬ限り僕も誓いはしない、と言った。 12 その後、アルキビアデスはクリュソポリスでファルナバズスが送り込んだミトロパテスとアルナペスとに、ファルナバズスはカルケドンでアルキビアデスから送られたエウリュボレモスとディオティモスとに、共通の誓いを誓い、個人的にもお互いに信義を取り交わした。

13 ファルナバズスはそこで直ちに去ったが、大王のもとに赴く使節に対してはキュジコスで自分に合流するように命じた。派遣されたアテナイ人は、ドロテオス、フィロキュデス、テオゲネス、エウリュプトレモス、マンティテオスであり、彼らと共にアルゴス人のクレオストラトスとピュッロロコスが加わった。スパルタ人使節も赴いたが、それはパシッピダスその他で、彼らにシュラクサイからの追放者となったヘルモクラテスと彼の兄弟プロクセノスが加わっていた。

14 そして、ファルナバズスは彼らを案内した。一方、アテナイ人は包囲壁を作ってビュザンティオンの包囲し続け、壁に向けて矢を放ったり突撃を行ったりしていた。 15 ビュザンティオンにいたのは、スパルタの統治官であるクレアルコスと彼に従うペリオイコイの何人かと少数のネオダモデス、メガラ軍とその指揮官であるメガラ人ヘリクソス、ボイオティア軍とその指揮官コイラタダスであった。 16 アテナイ軍は力では何も達成し得なかったので、ビュザンティオン人の何人かに国を裏切るよう説得した。 17 統治官のクレアルコスはそうしたことをなす者は誰もいないだろうと考え、すべてを出来る限りきちんと整えた上、国内のことをコイラタダスとヘリクソスに委ね、大陸側のファルナバズスのもとに渡った。兵士への給金を彼から得、艦船を集めようとしたのである。艦船はヘレスポントスのあちこちに監視船としてパシッピダスによって残されていたし、いくつかはミンダロスの副官アゲサンドリダスがトラキアで使用中であった。また何隻かをアンタンドロスで建造させ、すべてを集めてアテナイ人の同盟国を攻撃して軍をビュザンティオンから引き離そうと

も考えていた。

18 クレアルコスが出航した後、国を裏切るビュザンティオン人が現れた。キュドン、アリストン、アナクシクラテス、リュクルゴス、アナクシラオスである。19 (アナクシラオスは後にラケダイモンでこの裏切りのゆえに死罪に問われたが、無罪となった。弁明で彼は、これは国への裏切りではない、救済なのだ、子供や女性が餓えの故に死んでゆくのを目撃したのだし、自分はラケダイモン人ではなくビュザンティオン人なのだから、と主張した。クレアルコスは残っていた食糧を兵士に与えた、だから敵を導き入れたのであって、金のためでもラケダイモン人を嫌っているためでもない、と言った。) 20 彼らは用意を調べると、夜間トラキア側と呼ばれる門を開いて兵とアルキピアデスを中心に導き入れた。21 ヘリクソスとコイラタダスはこのことを何も知らず、全軍を率いてアゴラへ援軍にやって来た。敵たちがあらゆるところを占拠していたので、何をなしていいかわからず、降伏することとなった。22 彼らはアテナイに送られ、ペイライエウスで民衆の間に降り立ったが、コイラタダスは逃げ出し無事にデケレイアにたどり着いた。

第4章

1 ファルナバゾスと使節はフリュギアのゴルデイオンで冬を過ごしていた時に、ビュザンティオンで起こったことを聞いた。

2 春の初め、大王のもとに赴いた使節は、大王のもとから戻る途次にあるラケダイモン人使節ポイオティオスとその連れ、およびその他の使節に出会ったが、彼らは、ラケダイモン人は必要なものはすべて大王から得ることが出来た、と語った。3 さらにキュロスにも出会ったが、この者は沿岸の全域を支配下におき、ラケダイモン人に加担して戦争に参加しようとしており、沿岸地域に住む全員に当てた大王の封印を持った手紙を携えていた。そこにはつぎのようにあった、「余はカストロスに集められた者たちのカラノンとしてキュロスを使わす」。「カラノン」とは「主人」の意である。

4 アテナイ人使節団はこれを聞き、さらにキュロスに会うと、何とか大王のもとに行きたい、しかしそれが叶わないなら祖国に戻りたい、と思った。5 他方、キュロスの方はファルナバズスに、使節団を自分に引き渡すか、さもなければ祖国にはまだ帰さぬようにせよ、と言った。彼はアテナイ人に起こっていることを知らせたくなかった。6 ファルナバズスはしばらくの間使節団を引き留めていた。ある時には大王のもとに彼らを連れて行くと言い、ある時には祖国まで送ると言って、何ら非難を受けないようにしたのである。7 しかし、3年が経った時、ファルナバズスは、大王のもとに連れて行かぬなら、海まで連れ帰ると自分は誓っていると申し立て、キュロスに彼らを解放してくれるよう願った。そこで彼らはアリオバルザネスのもとに使節団を送り、彼に使節団を護衛して行くよう命じた。彼はミュシアのキオスまで連れて行き、そこから使節団は残りの軍のもとに海路出発した。

8 アルキピアデスは、兵士たちと一緒に国に帰りたいと欲し、直ちにサモスへと船を乗り出した。そこで20隻を獲得すると、カリアのケラメイオス湾へと航行した。9 その地で100タラントンを集めるとサモスへと戻った。トラシュブロス、30隻を率いてトラキアへと赴き、タソスその他ラケダイモンへ寝返った土地を鎮静化した。タソスは戦争や内乱や飢饉によって痛めつけられていた。10 トラシュブロスはその他の艦船を率いてアテナイへと戻った。彼が帰る前にアテナイ人は将軍として、亡命中のアルキピアデス、遠くにいるトラシュブロス、3人目に国内からコノンを選んだ。

11 アルキピアデスはサモスから金を持って20隻の船でパロスへと航行し、そこから直ちにギュティオンへと出航し、ラケダイモン人がそこで30隻を準備中だと聞いていた三段櫓船を偵察し、かつまた故国への彼の帰還を当の祖国がどう思っているかを見定めようとした。12 そして祖国が自分に好意を抱き自分を将軍に選んでおり、さらに友人たちが個人的に招いてくれているのを見ると、祖国がプリュンテリア祭を催し、アテナ女神の像が隠されている日にペイライエウスへと帰航した。しかし、女

神像が隠されていたことを、ある者は彼にとっても祖国にとっても縁起が悪いと見なした。アテナイ人の誰もこんな日に重要なことを企てようなどしないであろうからというのであった。 13 彼が帰航すると、ペイライエウスからも町からも人々が船をめぐめて集まり、アルキビアデスを称賛し彼を見たがった。そして、彼こそが市民中最高の者だとか、唯一彼だけが不正にも亡命者になった〔と弁明した〕のだとか、口々に言い合った。——彼は自分より能力の劣った者たちの陰謀の犠牲者なのだ、奴らは中傷的なことを語ったり、自分自身の利益のために政治を行っているが、彼の方はいつも公共のものを、自分自身の力によったり国の力によったりしながら増大させているではないか。 14 秘儀を汚しているという彼に向けて当時生じていた非難に対して、その時すぐに裁判を受けたいと彼は望んだのに、彼の敵たちがこのまことにもっともと思われる要求を延期させて、不在の彼から祖国を奪ったのだ。 15 この間、彼は何の助けもないままに奴隷として敵対者に奉仕することを強制され、日々いつでも身を滅ぼす危険の中にあっただ。親しい市民たちや親族、国全体が過ちを犯すのを見ながら、亡命のために妨げられて彼はなすべき事をなせなかったのだ。 16 さらにこうした者たちは言い合った。——彼は新しい政体や革命を求めたりするような人物ではないのだ。何故なら、民主政体において彼は同年配の者に立ち勝り、年長の者たちにも引けを取らなかったのだから。一方、彼の敵たちは以前と同じ程度の人物に見える。後に彼らが力を握った時には最善の者たちを殺してしまい、彼らだけが残ったためほかに良い人物を使いようがなくて、市民は彼らに好意を示したのだ。

17 しかし、別の者たちは言った。——かつてわれわれを襲った災難の原因はこの男1人にある、今後わが国に生ずる恐れのある不幸の、唯一の責任者になる危険性もあるのではないか。

18 アルキビアデスは岸の近くに停泊したが、敵を恐れてすぐには上陸せず、甲板の上に立って自分の友人たちが近くにいないものかと眺めていた。 19 彼の従兄弟ペイシアナックスの子エウリュプトレモスや親族や彼らと共にいる友人たちを見つけると、ようやく船を下り、もし誰か

が彼を捕まえようとしたなら阻止する準備を整えていた者たちと一緒に町に向かった。 20 そして、評議会と民会において、私は不敬罪を犯していないと弁明した。私は不正を蒙った被害者だと言い、その他そうした類のことが語られた。反対する者が誰もいなかったのは、民会がそれを容赦しようとしなかったからであった。彼は全体の最高司令官と宣告された。祖国のかつての力を取り戻すことが出来ると考えられたからである。そして、それまで戦争の故に海を通して行われていたアテナイ人の秘儀への行進を、全軍を率いて出兵して陸を通して行わせた。

21 その後、軍を徴集し、重装兵 1500 人、騎兵 150 騎、艦船 100 隻を登録した。帰国後 3 ヶ月目に、アテナイから離反していたアンドロスへと出航した。彼と共に陸軍担当の将軍に選ばれていたアリストラテスとレウコロフィデスの子アデイマントスも一緒に派遣された。 22 アルキピアデスはアンドロス領のガウリオンへ上陸した。迎え撃つために出撃してきたアンドロス軍を打ち破り、城壁の中に閉じ込めた。そして、多くはないが幾人かを、そこにいたラコニア人と共に殺した。 23 アルキピアデスは勝利碑を建て、数日そこに留まった後サモスへ航行し、そこから出撃して戦争を続けた。

第5章

1 ラケダイモン人はこれより少し前に、クラテシッピダスの提督の任期が切れたので、リュサンドロスを提督として派遣した。リュサンドロスはロドスに到着するとそこで艦船を引き継ぎ、コスとミレトスへ航行し、そこからさらにエフェソスへ行き、そこでキュロスがサルデイスにつくまで、70 隻の船と共にとどまった。 2 キュロスがやって来ると、彼のもとにラケダイモンからの使節と共に赴いた。そこでティッサフェルネスを非難して彼がなしてきたことを述べ立て、キュロス自身には戦争に熱心になって欲しいと要望した。 3 キュロスは、父がそのことを命じてきているし、自分もそれ以外のことを考えておらず、すべてを履行するつもりである、と言った。さらに自分は 500 タラントンを持ってきている、

もしそれで足りないなら、父が自分に残した個人の金を使うし、もしそれでも足りないなら、自分の座っている金と銀からなる玉座を貨幣としよう、と言った。

4 一行はこれを称賛し、給料は水兵一人につき1アッティカ・ドラクマとしてくれるよう言った。この額にすれば、アテナイ側の水兵が船を離れるようになり、出費する金もより少なくなると説明したのである。 5

彼はよく言ってくれた、と言ったが、一方で、大王が自分に命じてきたことに反して何かをなすことは出来ないのだ、また協定でも、ラケダイモン人が何隻を望もうと、1隻あたり1ヶ月に30ムナを与えるというふうになっているではないか、と言った。

6 リュサンドロスはその時には沈黙を守っていた。しかし、夕食後、キュロスが彼のために乾杯し、何をすれば君は最も喜んでくれるかな、と尋ねた時、水兵1人につき給料に1オボロスを付け加えて下さったなら、と言った。 7 このためそれまで3オボロスであった給料が4オボロスとなった。そして、キュロスは先に借りたままになっていた給料を払ってやり、さらに1ヶ月分を先払いしたために、兵士たちの士気は大いに上がった。

8 アテナイ人はこのことを聞くと意気阻喪し、キュロスのもとにティッサフェルネスを通じて使者を送った。 9 ティッサフェルネスは懇願して、彼自身アルキビアデスに説得されて実践していたことを申し述べた。すなわち、ギリシア人の誰1人も強くすることなく、お互い同士内紛をさせてすべてを弱くしておくようお考えになるべきです、とである。しかし、キュロスは彼らを受け入れようとしなかった。

10 一方、リュサンドロスは自分の艦隊を整えてしまった後、エフェソスにいる90隻を陸に引き揚げ、それらを修理し乾燥させつつ、平静を保っていた。

11 アルキビアデスは、トラシュブロスがヘレスポントスを出てフォカイアに来て包囲していることを聞き、彼のもとに航行した。その際、彼の操舵長アンティオコスに船を委ね、リュサンドロスの船に攻撃はしかけ

るなど命じていた。12 しかし、アンティオコス自分の船とノティオンからの1隻とをエフェソスの港へと航行させ、リュサンドロスの船の鼻先を通過させた。13 リュサンドロスの方は、まず数隻を海に入れ、彼を追跡させたが、アテナイ人がアンティオコスを助けようと多数の船でやって来ると、全船を海に入れて戦闘隊形をとらせて攻撃をかけた。するとアテナイ側もノティオンから残りの船を海に入れ、各船陸を離れるや、出航させた。14 その後戦闘が起こったがラケダイモン側は戦列を組んで、一方、アテナイ側はばらばらなまま戦った。ついに15隻を失ったアテナイ側は逃走に転じた。多くの者は逃げおおせたが、ある者は捕虜となった。リュサンドロスは船を回収するとノティオンに勝利碑を建て、エフェソスへ向かって航行した。一方、アテナイ側はサモスへと向かった。

15 その後、アルキビアデスはサモスにやってくると全艦船を出航させ、エフェソスの港へと向かった。そして港の口で戦闘隊形を取り、海戦を望む者はあるかと挑発の姿勢を示した。しかし、リュサンドロスの方は船の数で大きく劣っていたため、対抗して出航しようとはしなかったので、サモスへと戻った。ラケダイモン人はその後しばらくしてデルフィニオンとエイオンとを取った。

16 本国のアテナイ人は、海戦の知らせが伝えられると、アルキビアデスの怠慢と自制心のなさが艦船の破滅をもたらしたと考え、彼に対して怒りを示した。そして、新たに10人の将軍を選んだ。すなわち、コノン、ディオメドン、レオン、ペリクレス、エラシニデス、アリストクラテス、アルケストラトス、プロトマコス、トラシュロス、アリストゲネスであった。17 アルキビアデスは兵士の間でさえ立場が悪くなり、三段櫓船1隻を確保しケルソネソスの自分の城塞に戻った。

18 その後、コノンは彼が指揮していた20隻の船と共にアンドロスからサモスに航行し、アテナイの投票決議にしたがって艦隊指揮権を取った。コノンの代わりにはファノステネスがアンドロスに4隻の船と共に派遣された。19 ファノステネスはたまたまトゥリオイからの2隻の船に行き当たり、乗組員と共に拿捕した。アテナイ人は捕まえた者全員を縛り上

げた。彼らの指揮官ドリエウスは元来ロドス人であったが、昔アテナイ人によって親族と共に死罪の判決を下されて、アテナイとロドスから逃亡した人物で、今はトゥリオイの市民となっていた。この者に対してアテナイ人は哀れを催し金も取らずに解放した。 20 コノンは、サモスに到着し戦意を失った艦隊を引き継ぐと、かつて 100 隻以上あった艦隊に代えて 70 隻に人員を満たし、その他の将軍と共にそれらを率いて出航し、さまざまなところに上陸しては敵の土地を荒らし回った。

21 かくてこの年は終わったが、この年にはカルタゴ人がシケリアに 120 隻の船と 12 万の歩兵を率いて遠征し、戦闘では敗れたが、7ヶ月間にわたってアクラガスを包囲し続け、餓えによって占領した。

第6章

1 翌年には、ある晩に月が欠けることが起こり、アテナイではアテナ女神の古い神殿が焼け落ちることが起こった。[ピテュアスが監督官、アテナイではカリアスがアルコンであった。] ラケダイモン人は、リュサンドロスの任期が切れたので、[戦争は 24 年間続いていた]、海軍担当としてカリクラティダスを送った。

2 リュサンドロスは艦船を引き渡す時、カリクラティダスに、私は海の覇者、海戦の勝利者として艦船を引き渡す、と言った。カリクラティダスは、エフェソスからアテナイ艦隊のあるサモスを左側に見ながら回航して、ミレトスで艦船を引き渡して頂きたい、さすれば貴殿を海の覇者と認めよう、と言った。 3 リュサンドロスは、他人が指揮官の時にお節介をするようなことはしない、と言ったため、カリクラティダス自身が指揮をとってリュサンドロスから引き継いだ船に加えて、キオス、ロドスその他の同盟国からの 50 隻にも人員を乗り組ませた。そして、これらすべてを集結させ—— 140 隻となった——、敵と戦うべく用意を調えた。

4 ところがカリクラティダスは、リュサンドロスの友人たちが彼に反発する動きを強めていることを知った。仕事に熱を入れただけでなく、ラケダイモン人は海軍指揮官を代えるという大失敗をやらかしたという言

説を諸国に広めていた——しばしば役立たずで、海のことを知らず、人を
使いこなすことが出来ない者が指揮官となるが、ラケダイモン人は海の経
験がなくその地の人間に知られてもいない者を派遣した、そのせいで何か
災難を蒙る危険がある、と——。そこでカリクラティダスは、その地に
いるラケダイモン人を召集すると、彼らにつぎのように言った。 5 「私
は祖国にとどまることを好む者だ。リュサンドロスであれその他の誰であ
れ、海について私より経験があると主張したいのなら、私は私への非難を
妨げはせぬ。しかし、かくなる私は国によって海軍を担当すべく使われ
た者なのだ。命ぜられたことを力の限り果たす以外に私のなすべきことは
ない。諸君は、私が名誉をかけて追い求めていること、わが祖国スパルタ
が非難されていること（それを諸君は私同様よくご存じであろう）、それ
に照らして、私がこの地にとどまるべきか、祖国に帰ってこの地の状況を
語るべきか、諸君にとって最善と思われることを助言してもらいたい。」

6 誰も、祖国の命令に服し来航目的を果たすべしという以外には何も
言おうとしなかったので、彼はキュロスのもとに赴き、海兵のために給金
を払ってくれるよう要請した。キュロスは2日間待つように言った。 7

カリクラティダスは苛立ち、何度も宮廷を訪れなければならないことに
怒りを発して、ギリシア人は惨めこの上ない状況にある、金のためにバル
バロイのご機嫌を取っているのだから、と言った。そして、祖国に無事戻
った暁には、アテナイ人とラケダイモン人の和解のために全力を尽くすと
宣言して、ミレトスへと戻った。 8 そこからラケダイモンへ金を求め
て三段櫓船を送る一方、ミレトス人の民会を召集してつぎのように語った。
「ミレトス人諸君よ、私は祖国の役人たちに従わねばならない立場にある。
バルバロイの中に住んでいる諸君は、これまで多くの災難を彼らから蒙っ
ているのだから、戦争に必死の覚悟で取り組まなければならないと私は考
える。 9 諸君らは他の同盟諸国に、われわれが如何にして素早く最大
の害を敵たちに与え得るかを、私が金を持ってくるようにと使わした者た
ちがラケダイモンから戻ってくるまでに、示さなければならない。 10

リュサンドロスがこの地にあった金を余剰金であるかのようにキュロス

に返して行ってしまったのであるし、キュロスは私が訪ねるたびに私との会見を先延ばしにし、私は彼の宮殿を何度も訪れることに得心できぬようになった。 11 諸君に私は約束する、われわれが金を待つ間にわれわれのために働いてくれた功勞に対しては必ずそれに相応しい恩恵を与える、とである。さあ、神のご加護と共にバルバロイに、彼らを崇め祀らずとも敵に復讐できることを示してやろうではないか。」

12 彼がこう語ると、多くの者、とりわけ彼に反対していると非難されていた者たちは恐れから立ち上がり、つぎつぎと金を増やす方法を提言し、個人的にも献金を申し出た。彼はこれを受け取り、キオスから海兵各人に5ドラクマが旅費として支払われるようにすると、敵対していたレスボスのメテュムナへ航行した。

13 メテュムナ人は、守備していたのがアテナイ人であり、政治の中樞を握っていたのが親アテナイ派であることから、協力しようとしなかったため、彼は攻撃をしかけてこの国を力づくで占領した。 14 兵士たちは財産のすべてを掠奪し、カリクラティダスは捕虜となった者を全員アグラへ集めた。同盟国はメテュムナ人をも売り払うよう主張したが、カリクラティダスは自分が指揮をとる限り、ギリシア人を自分の命令で奴隷にすることは決してない、と言った。 15 つぎの日、自由人は解放したが、アテナイ人の守備兵と奴隷の捕虜は全員売り払った。またコノンに対して、海を寝取るようなまねはよせ、と伝えた。夜明と共にコノンが海に乗り出したのを見ると、サモスへ逃げぬよう、そこへの航行の道を断ちきろうと追跡を始めた。

16 コノンは、多くの乗組員の中から最上の漕ぎ手を集めて少数の船に乗せたため、船足の速くなった船で逃れ、レスボスのミュティレネに逃げ込んだ。彼には10人の将軍中レオンとエラシニデスが従っていた。カリクラティダスは170隻の船で追跡し、彼らと一緒に港に入った。 17

到着したコノンは市民に阻まれ、港の近くで海戦を余儀なくされ、30隻を失ったが、乗員は陸へと逃れた。残りの40隻の船は城壁の下に引き揚げた。 18 カリクラティダスは港に停泊すると町を包囲し、出て行く

船を監視した。また陸ではメテュムナ軍全軍を呼び寄せ、キオスからも兵士を渡航させた。そして、キュロスから金が届いた。

19 コノンは、海からも陸からも包囲され、食糧がどこからも供給されず、多くの人間が町にいながら、アテナイ人はそのことを知らないために援軍に来ようとしめない状況を認識すると、最速船2隻に乗員を乗り組ませると夜明け前に海に入れた。すべての船の中から最高の漕ぎ手を選び、乗船戦闘員を船倉に移した上、防禦幕を下ろさせた。20 そして昼の間はこのようにしていたが、夕刻となり暗くなって、敵たちに何をしているのか見えなくなると、乗組員を下ろした。そして、これを繰り返した。5日目、適度の食糧を積み込むと、まだ昼の真っ盛りで包囲兵たちの注意力も散漫となり、休んでいる者もいる状況下で、港から漕ぎ出て、1隻はヘレスポントスへ、もう1隻は大海を目指した。21 包囲兵たちは各船出航しようと、碇を切ったり目を覚ましたりしたが、陸で朝食をとっていた者もいて混乱の中で援軍へと向かった。乗船した者たちは大海に向かった船を追跡し、日没時に追いつくと、海戦によって制圧し、乗員と一緒に陣営に曳航した。22 しかし、ヘレスポントスへ向かって逃げた船は逃げおおせ、アテナイに包囲のことを知らせた。ディオメドンが包囲されているキモンを助けに12隻の船でやって来、ミュティレネの海峡に停泊した。23 カリクラティダスは突然彼を襲い、10隻を獲得した。ディオメドンは自らの船ともう1隻の船で逃れた。

24 アテナイ人はこうした出来事と包囲のことを聞くと、援軍として110隻の船を派遣することを投票決議し、奴隷であれ自由人であれ成人に達した者全員を乗船させた。そして110隻に30日で乗員を満たし、出発した。騎兵も多く乗船させた。25 その後、サモスへと向かい、そこでサモス船10隻を得た。その他に30隻以上を他の同盟国から集め、全員を強制して乗船させた。また外国に彼らの持つ船があれば同様にした。全船で150隻以上になった。

26 カリクラティダスは援軍がすでにサモスに来ていることを聞くと、50隻をエテオニコス麾下に残し、120隻を率いて出発した。そしてレス

ボスのマレア岬〔ミュティレネの反対側〕で夕食を取った。27 同じ日アテナイ軍もまたアルギヌサイで夕食を取っていた。その島々はミュティレネの反対側〔レスボスのマレア岬の反対側〕にある。28 夜に火を見、アテナイ人がいると何人かから教えられると、カリクラティダスは真夜中に出航し、奇襲をかけようとした。しかし、降り出した大雨と雷が彼らの出航を妨げた。それが止んだ後、夜明と共にアルギヌサイに航行した。

29 アテナイ側はこれに対抗して左翼側から海へと乗り出した。その布陣はつぎのようであった。アリストクラテスは左翼を指揮して15隻を率い、その横にディオメドンが別の15隻を率いた。アリストクラテスの後にはペリクレスが、ディオメドンの後にはエラシニデスが隊列を整えていた。ディオメドンの横にはサモス艦隊10隻が1列に並び、それを指揮していたサモス人将軍はヒッペウスという名であった。それに10人の歩兵指揮官が続き、やはり1列に並んでいた。その後に提督の船3隻と、その他の同盟国軍の船何隻かが従った。30 右翼にはプロトマコスが15隻を率いていた。彼の横にはトラシュロスが別の15隻を率いていた。プロトマコスの後ろにはリュシアスが同じ数の船を率いて、トラシュロスの後にはアリストゲネスが布陣した。31 アテナイ軍は敵に戦列突破をされぬよう、このように配置されたが、それはアテナイ軍の船が劣っていたためである。一方、対抗するラケダイモン軍の方は、全船1列に配置し、戦列突破と回転攻撃を狙って用意を調えた。こちらの船の方が優っていたからである。カリクラティダスは右翼を指揮していた。32 カリクラティダスの船の操舵長を勤めていたメガラ人ヘルモンは、アテナイ軍の船の方がはるかに数が多いのだから、退却するのがよろしかろう、と彼に言った。カリクラティダスは答えて言った、私が死んでもスパルタの状況が悪くなるわけではない、しかし、逃げれば恥となる、と。

33 その後、両軍は長く交戦した。最初は密集していたが、その後はばらばらとなった。カリクラティダスが乗艦の衝角攻撃の際に海に落ちて見えなくなり、プロトマコスと彼に従う右翼軍が敵の左翼に勝つと、ペロ

ボネソス軍はキオスを目指しての逃走に転じ、多くはフォカイアへと逃げた。アテナイ軍は、再びアルギヌサイへ帰航した。 34 アテナイ軍は25隻を、陸に運ばれたわずかの者を除き、乗員と共に失い、ペロポネソス軍は、全部で10隻あったラコニア船のうち9隻と、60隻以上の同盟国船を失った。 35 アテナイ軍の将軍たちは、三段櫓船長であったテラメネスとトラシュプロスと歩兵指揮官の何人かを47隻の船で沈没した船とその乗組員の救助に向かわせることと、残りはミュティレネ包囲中のエテオニコス攻撃に向かうこととを決定した。彼らはこうしたことを望んでいたが風と雨が強まり、それを妨げた。そこで戦勝碑を建て宿営した。

36 エテオニコスには小型船が海戦についてすべてを伝えた。彼はこれを再び送り出しながら、乗組員に、黙って出航し、誰にも言うな、そしてすぐにまたわれわれの陣営に冠をかぶり、「海戦はカリクラティダスの勝利だ、アテナイ船は全部壊滅した」と叫びつつやって来い、と言った。

37 彼らは言う通りにした。彼は、彼らが戻った時、いい知らせに犠牲を捧げた。そして、兵士に対しては夕食を取るように命じ、商人たちには黙って商品を積み込みキオスへ戻るよう（風が順風だった）、三段櫓船には全速力を指示した。 38 彼自身は歩兵を率いて、陣営を焼き払った後、メテウムナに向かった。コノンの方は、敵たちが撤退し、風がいくらか穏やかになると、船を海に入れた。すでにアルギヌサイから出立していたアテナイ船に出会くと、彼はエテオニコスのことを語った。アテナイ軍はミュティレネに戻ると、そこからキオスへと向かったが、何も達成できぬままサモスへと帰航した。

第7章

1 本国のアテナイ人は、これらの将軍たちをコノンを除いて免職にした。そして、コノンに加えてアデイマントスと3人目にフィロクレスを選んだ。 2 海戦を戦った将軍のうちプロトマコスとアリストゲネスはアテナイに戻らなかったが、6人は戻った。すなわち、ペリクレス、ディオメドン、リュシ阿斯、アリストクラテス、トラシュロス、エラシニデスで

ある。当時アテナイで民衆の指導者であり、2オボロス基金の管理役であったアルケデモスは、エラシニデスに罰金を課し、法廷で弾劾した。ヘレスポントスから公金を横領しているというのである。また將軍の職務についても非難した。法廷はエラシニデスを拘束することを決定した。 3
その後、將軍たちは評議会において海戦と嵐の大きさを詳しく説明した。しかし、ティモクラテスはその他の者たちも拘束して民会に引き渡すべきだと発言し、評議会は彼らを拘束した。

4 その後民会が開かれ、人々は將軍たちをこもごも非難したが、中でもテラメネスは厳しく、將軍たちは遭難した者を救い上げようとしなかったのだから、査定を受けて当然であると主張した。そして、將軍たちがその他の誰も叱責していなかったことを示す証拠として、彼らが評議会と民会に送った、嵐以外に原因はないとの趣旨の書簡を示した。 5 その後、將軍たちはそれぞれ短く自己を弁明した（自らのための弁明は、法によって、認められていなかったから）。そして起こったことを詳細に説明した——自分たち自身は敵に向かおうとしたのだ、遭難者の救い上げは三段櫓船長の中でもその力がありすでに將軍も務めたことのある者たち、つまりテラメネスやトラシュブロスその他に委ねたのだ、 6 だからもし非難すべき誰かが必要だというのなら、その任務が与えられた者たちのほかに非難すべき者はいない。しかし、彼らがわれわれを弾劾しているからといって、彼らに罪があるなどと嘘を言うつもりはない、嵐の大きさが救い上げを妨げたのだ。このことの証人として操舵長やその他一緒に航海した者の多くを提供した。こうしたことを語って彼らは民衆を説得しつつあった。

7 多くの個人が立ち上がり、保証人となることを望んだ。しかし、別の民会まで延期することと（というのも、その時にはすでに遅くなっている）、評議会がこの者たちがどのようなやり方で判決を受けるべきか先議して提案することとを決議した。

8 その後、アパトゥリア祭が祀られたが、この祭りでは父や親族が互いに顔を合わせることでなっている。そこでテラメネス一派は、この祭り

の日に多くの人間に黒衣を着せ髪を短く刈り込ませるようにした。彼らが民会に出た時に、死者の親族であると思わせるためである。そして、カリクセノスに評議会で將軍たちを告発するよう説得した。

9 そして民会が開かれたが、そこに評議会はカリクセノス提案の以下のような議決案を自らの提案として提出した、「先の民会において、將軍に対する告発と將軍たちの弁明が聞かれたのだから、アテナイ人全員は部族ごとに投票すべきこと。各部族に2つの投票壺が置かれること、各部族に伝令使が、海戦に勝利した者たちを引き揚げなかった將軍たちに不正ありと思う者は第1の壺に、そうは思わぬ者は第2の壺に投票すべきこと、と布令ること。10 不正ありと決議されたなら、罰は死罪とすべきこと、11 人に引き渡し財産は没収し、10分の1はアテナ女神のものたること。」

11 するとある男が民会にやって来ると、自分は穀物用の樽で助かったのであるが、死なんとする者たちに頼まれたのだ、と主張した。もし助かったなら、將軍たちは祖国のために最も勇敢であった者たちを引き揚げようとしなかったと民会に伝えてくれ、とである。

12 カリクセノスは違法提案をしているとして、ペシアナックスの子エウリュプトレモスとその他の何人かが彼を召喚した。民衆の中にはこれに賛成した者もいたが、多くの者は人に望むことをさせないとは恐ろしいことだと叫んだ。13 それに加えてリュシコスが、もしこの召喚を取り消さないなら、彼らにもまた將軍たちと同じ投票で判決を下すべきだ、と言うと、群衆が再び騒ぎ立てたため、この召喚は取り消されざるを得なくなった。14 当番評議員の中の何人かは、法に反する投票に反対したが、カリクセノスは再び登壇し、彼らを同じ罪状で告発した。15 当番評議員は皆恐ろしさから投票に賛成したが、ソフロニスコスの子ソクラテスだけは例外であった。この者は、法にしたがってすべてをなすべきだということ以外は主張しなかった。

16 その後エウリュプトレモスが登壇し、將軍たちのために以下のよう

に語った。

「アテナイ人諸君、私がここに登壇したのは、私にとって親しい親族の

ペリクレスと友人のディオメドンを告発するためであり、また彼らを弁護するためである。そして、祖国全体にとって最善であると私が思うところを助言するためである。 17 私が彼らを告発するのは、同僚たちが評議会と皆さんとに書簡を送り、テラメネスとトラシュブロスに47隻で遭難した者たちを引き揚げるように命じたが、彼らがそうしなかったのだと告げようとしたのを、説き伏せ止めさせたからだ。 18 そのために、彼らの個人的過失にもかかわらず今や全員に対する非難の元となっているではないか、さらに当時の親切心は今や彼らとその他の者による謀略によって身を滅ぼす危険を生み出しているではないか。

19 「しかし、そうしたことがあってはならぬのだ。諸君が私の言うことに耳を傾け、公明正大な正義の振る舞いを心がけるならば、諸君はそれによって真実を最もよく学び、自分たち自身が神々と自らに対し最大の過ちをなしたことを知って後悔することはないであろう。私は諸君に助言する——私によってもその他の誰によっても諸君が欺されないやり方で犯罪者を見つけ、諸君の望む罰で、全員一緒であっても各人それぞれであってもよいから、罰し給え。またそれ以上は必要ないとしても1日は、彼らに弁明のために与え給え。そして自分自身以外は信じてはならぬ。

20 「アテナイ人諸君、カンノノスの投票決議が格別厳しいことを諸君は全員ご存じだ。この投票決議は、もし何人かがアテナイ人民衆の誰かに不正を加えたなら、縛られたまま人々の前で弁明すべきこと、もし犯罪者として有罪と判決されたなら、死刑とされバラトロンの投げ入れられること、その者の財産は没収され、アテナ女神が10分の1を取ることで命じている。 21 この投票決議にしたがって将軍たちを裁くことを私は求める、そしてゼウスに誓って、諸君らがそう決するなら、わが親族ペリクレスから始めてもらって何ら構わない。この者を祖国全体よりも重く見なすのは私にとって恥ずべきことであるから。 22 しかし、諸君が望むのなら、聖財横領や売国に関わる別の法にしたがって判決してもよい。この法は、もし何人かが祖国を裏切ったり、聖財を盗んだりするなら、民衆法廷で裁かれ、有罪の場合は、その者はアッティカに埋葬されず、財産

は没収されること、としている。

23 「いずれの法によることを諸君が望もうと、アテナイ人諸君、裁かれる者は1人ずつ判決されるべきである。しかも、1日を3つの部分に、すなわち、1つは諸君が集まり（不正であるかそうでないかを）投票するための、1つは告発するための、1つは弁明するための部分に分けた上でそうすべきなのである。24 こうすれば、アテナイ人諸君、諸君によって不正者には最大の罰が与えられ、無実の者は自由とされ、不正に死ぬことはないだろう。25 諸君は法にしたがって敬虔に誓いを守りつつ判決を下すこととなるのだし、70隻の船を奪って勝利したかの者たちを法に反して裁判もなしに破滅させてラケダイモン軍の味方をするものもないのだ。26 諸君は一体何を恐れかくも急いでいるのだ？ 法にしたがって裁くとすれば、諸君の望む者を殺したり自由にしたり出来ぬと恐れているのか？ そしてカリクセノスが評議会を説得して1つの投票によるよう民会に提案したように、法に反して裁けばそうしたことはないと考えているのか？ 27 しかし、おそらく諸君は無罪の者までも殺してしまい、後から後悔することになるだろう。だが覚えておくが良い、後悔は苦しくしかも無意味なのだ、とりわけ人の死について過ちを犯した場合は。

28 諸君は恐ろしいことをなすことになるのだ、もしアリストアルコスに、先に民主政を解体し、ついでオイノエを敵のテバイ人に売り渡したあの人物には、望むやり方で弁明させるために1日を与え、その他のことについてもすべて法にしたがって処理しながら、諸君の意見にしたがってすべてを実行し、敵に勝利した將軍たちからは、この同じ権利を奪うとすればだ。29 そのようなことをなしてはならないのだ、アテナイ人諸君。諸君自身のものである法、諸君をとりわけ偉大なものとしている法というものを守るのだ、それなしに何事かをなそうなどとしめないことだ。

「ここで將軍たちに過ちが生じたと思われる出来事そのものに戻って頂きたい。海戦で勝利した者たちが陸に帰航した時、ディオメドンは全船列をなして難破船と難破した者を引き揚げに行くよう提案し、エラシニデスは全船ミュティレネの敵に当たるべく全速力で航行するように提案し

た。ところが、トラシュロスはそこにいくらかの船を残し、その他で敵に向かえば両方が可能だと主張した。 30 このことが決議されるなら、残される船は、8人の将軍それぞれの分隊から3隻ずつ、歩兵指揮官の10隻、サモスからの10隻、提督の船3隻であるべきで、全部で47隻、破損した12隻のそれぞれについて4隻となろう、と彼は主張した。 31

残される三段櫓船長の中にはトラシュプロスとテラメネスがいたが、この者は先の民会で将軍を告発した人物である。残りの船は敵に向かわんとしていた。これらの何が不十分で、まずい処置だったろうか？ しかし、敵に向かった者たちは彼らに命ぜられたことをうまく果たせなかったのであるから審査を受け、救済に向かった者は救済が出来ず、将軍たちの命じたことを遂行できなかったのであるから判決を受ける、というのが正義ではなかろうか？ 32 しかし、私は双方のためにつぎのことは言わねばならない。すなわち、嵐が将軍たちの用意したことを妨げた、ということである。このことの証人はたまたま助けられた者たちであり、その1人はわれわれの将軍で沈もうとする船から助けられた人物である。その時引き揚げられねばならなかったこの将軍を、告発者たちは命じられたことをなさなかった者たちと同じ投票で裁くよう命じているのだ。 33 アテナイ人諸君、勝利と幸運を前にして、敗者や不運な者と同じことを行ってはならない。神による必然を前にして、不見識であったなどと考えるはならない。不可抗力を国家への裏切りなどと判決してはならないのだ。[嵐の故に命令を遂行できなくなったのである。] 勝者を冠によって称賛することこそ、悪しき男たちの言うなりに死で罰するよりはるかに正義になったことである。]

34 以上のようにエウリュプトレモスは語ると、カンノノスの投票決議にしたがって10人を別々に裁くべしとの提案を提出した。しかし、評議会の提案は1回の投票で全員を裁くべしというものであった。これらについて挙手投票が行われると、最初はエウリュプトレモスの提案が採択された。しかし、メネクレスが誓いに基づく反対をして再度の挙手投票がなされると、評議会の提案が採択された。そしてその後、海戦に参加した8

人の将軍は有罪と判決され、出席していた6人は処刑された。

35 その後長からずしてアテナイ人は後悔することとなり、誰であれ民会を欺いた者には民会提訴あるべきこと、そしてその者たちは裁判まで保証人を立てること、カリクセノスも提訴さるべき1人たること、と投票決議した。その他にも4人に民会提訴がなされ、保証人によって拘束された。その後、クレオフォンが死んだ内乱が生じた時、彼らは裁判の前であったが、逃走した。カリクセノスは、ペイライエウス派が町に帰還した際に戻ったが、皆に蔑まれ、餓えから死んだ。

第2巻

第1章

1 キオスにあったエテオニコス麾下の兵士たちは、夏の間は季節の収穫物と土地での賃貸仕事によって食いつないでいた。しかし、冬になると食糧も着るものも履くものも事欠くようになり、お互いに仲間を作るとキオスを攻撃しようと合意した。そして、このことを良しとする者は葦を携え、互いにどれほどの者が参加するかわかるようにしようと決めた。 2

エテオニコスはこの企みを知ったが、葦を持った者の数の多さのために事をどのように処理すべきか迷った。何故なら、彼らを公然と押さえようとするのは危険なことのよう思われたからである。彼らは武器に殺到し、町を占領してしまうだろう、そして、彼らが勝利したなら、ラケダイモンの敵対者となってすべてを台無しにしてしまうだろう。さらに、同盟者の多くを殺すことになってしまうのも恐ろしいことのよう思われた。その他のギリシア人に何らかの悪しき評判を立てることになるであろうし、兵士たちは働くことを嫌うことになろう。 3 そこで彼は、短剣をしのばせた15人の人間を従えて町中を歩き、目を患った男が医者から出て来るところに出くわすと、葦を持っていたのでその者を殺した。 4 騒ぎが起こり、人々が何故この者は殺されたのかと尋ねると、エテオニコスは、葦を持っていたからだ、と伝えるよう命じた。これが伝わると、葦を持って

いた者たちは皆、それを持っているのを見られるのを恐れて投げ捨てることとなった。

5 その後、エテオニコスはキオス人を呼び集め、水兵たちが給金を得て反乱を起こさぬように、金を持ち寄るよう命じた。キオス人はその通りにした。それと同時に彼は乗船の合図を出した。そして順次それぞれの船を訪れて、起こったことなど知らないように、さまざまに励まし助言を与え、各人に月の給金を与えた。

6 その後、キオス軍とその他の同盟軍はエフェソスに集合し、現今の状況について話し合い、ラケダイモンに使節を送ってこの状況を説明し、リュサンドロスに海軍の指揮を要請すべきことを決した。彼は同盟軍の間で、ノティオンで勝利した際の海軍指揮のあり方から、好評を得ていたのである。7 そして、使節が送られたが、彼らと共にキュロスからの使者も同じことを要請するために送られた。ラケダイモン人はリュサンドロスを派遣したが、副提督としてであり、提督はアラコスとした。というのは、同じ人間が二度提督となってはならぬ、という法が彼らにはあったからである。しかし、艦隊はリュサンドロスに委ねられた。[戦争がすでに25年を経過していた年であった。]

8 この年キュロスもダレイオスの姉妹 [ダレイオスの父クセルクセスの娘] の息子であるアウトボイサクセスとミトライオスを殺した。彼と会った時長袖 (コレー) に手を差し入れなかったというのが理由であった。これは王に対してだけなすものである。長袖 (コレー) はゆる袖 (ケイリス) よりも長く、その中に手を入れてしまうと何も出来なくなる。9 そこでヒエラメネスと妻はダレイアイオスに対して、こうした驕慢が見過ごされるなら恐ろしいことです、と述べた。王は使者を使わして、自分が病気だとして彼を呼び戻した。

10 翌年 [アルキュタスが監督官で、アテナイではアレクシオスがアルコンであった] には、リュサンドロスがエフェソスに到着し、エテオニコスを艦隊と共にキオスから呼び戻すと、その他のすべての艦船も、もしどこかにあれば、呼び集めた。そしてそれらを修理すると共に、アンタン

ドロスでは新しい船を作らせた。 11 またキュロスの下に赴き、金を要請した。キュロスは彼に、大王のもとからの金は使われてしまった、と言い、さらにそれ以上のものが使われていると、各提督が受け取った額を示したが、金は出してくれた。 12 リュサンドロスは金を得ると、各艦船に艦船長を任命し、水兵には未払いの給金を払ってやった。一方、アテナイの將軍たちもサモスで海軍の準備を整えていた。

13 キュロスは、父のもとから使者が来て、大王が病気であり彼を呼んでいると告げられると、リュサンドロスと呼び戻した。大王は反乱したカドゥシオイ族を討つために遠征し、彼らの土地の近辺メディアのタムネリアに滞在中であった。 14 リュサンドロスが来ると、キュロスは船の数ではるかに勝るまで、アテナイと海戦することを禁じた。そして、大王のもとにも自分のもとにも金はたくさんある、金に関する限りたくさんの船を装備できるのだから、と理由を示した。また諸国からの貢租のうち、彼に個人的に帰属する分すべてをリュサンドロスに与え、余った金も与えた。そして、ラケダイモン人国家とリュサンドロスに対し如何に彼が個人的友情を示したかを思い出させると、大王のもとへ出発した。

15 リュサンドロスは、呼び戻されたキュロスが彼に属するものをすべて与えて病気の父のもとに出発すると、兵士たちに給金を与え、カリアのケラメイオン湾へ向けて出航した。アテナイ側の同盟國中ケドレイアイという名の国を攻め、2日目の攻撃で武力により占領すると住民を奴隷とした。彼らはバルバロイとの混血であった。そこからロドスへと航行した。

16 他方、アテナイ人の方はサモスから出撃して大王の領土を荒らし、キオスやエフェソスにも航行していた。また海戦への準備も着々と進め、今ある將軍に加え、メナンドロス、テュデウス、ケフィソドトスを將軍に選んだ。 17 リュサンドロスはロドスから出てイオニア沿岸をヘレスポントスへ向けて航海し、穀物船を阻止し、ラケダイモンから離反した国を鎮圧しようとした。アテナイ軍もキオスへ航行していたが、大海を通った。アジアが彼らに敵対していたからである。

18 リュサンドロスはアビュドスから、アテナイ人の同盟国であるラ

ンプサコスへ向かって航行した。アビュドス軍と同盟国軍が徒歩で並行して進んだ。ラケダイモン人のトラクスがその指揮官であった。 19 彼らは町を攻撃し力づくで占領し、兵士たちはこの豊かで、酒や穀物やその他の必需品で満ちた町を掠奪した。リュサンドロスの方は、捕虜となった者全員を解放した。 20 アテナイ軍は彼らのすぐ後を航行し、ケルソネソスのエライウスに180隻の船を停泊させた。そこで朝食をとっているとランプサコスの出来事が知らされ、直ちにセストスに向けて出航した。

21 そこから食糧を調達すると、ランプサコスの対岸アイゴスポタモイへと航行した。ヘレスポントスとこことは15スタディオンの隔たりである。ここで彼らは夕食をとった。

22 リュサンドロスは、その夜更け、夜明け前のまだ暗い時期に、朝食をとって乗船するよう合図を出し、海戦に向けてすべての準備を整え、防禦幕を下ろさせると、何人も部署を離れてはならぬし、出航してもならないと伝えた。 23 一方、アテナイ軍は、夜が明けると、戦闘に入るように港の前で1列隊形に船を並べた。しかし、リュサンドロスは出撃してこず、日も遅くなると、彼らは再びアイゴスポタモイへと戻った。

24 リュサンドロスは、最速船にアテナイ軍の後を追い、彼らが下船してから何をするかを見届けた上で戻って自分に報告するように命じた。そして、それらの船が戻ってくるまで下船を命じなかった。同じことを彼は4日間繰り返した。アテナイ軍の方も出船を繰り返した。

25 アルキビアデスは自分の要塞から、アテナイ軍が町が近くにはない浜に停泊し、船から15スタディオン離れたセストスで必要品を調達しているのに対し、敵軍は町の近くの港に停泊しすべて必要なものを持っているのを見て、アテナイ人に停泊しているのは好いところではないと言い、町にも近いセストスの港に停泊地を移すべきだと忠告した。そこからなら、諸君はいつでも好きなときに海戦に入ることが出来る、と彼は言った。

26 しかし、将軍たち、とくにテュデウスとメナンドロスは、彼に立ち去るよう命じた。今将軍であるのは自分たちであって、彼ではないのだから、との主張であった。彼は立ち去った。

27 リュサンドロスは、アテナイ軍が出撃を繰り返して5日目になったとき、彼に従う者たちに言った、彼らが下船し、ケルソネソスに散開してしまったのを見たなら——アテナイ軍は日々ますますそうすることが多くなっていた、食糧を遠くから購入していたし、リュサンドロスが攻撃してこないため彼を軽侮していたのである——、こちらに戻りつつ航海途中で盾を挙げよ、と。部下は命令通りに行った。28 リュサンドロスは直ちに全速航行を命じた。トラクスも陸軍を率いて併走した。コノンは出撃を見ると、各船に全力援助の指示を出した。しかし、人々は散開してしまっていたため、ある船は2段しか、ある船は1段しか漕ぎ手を集め得ず、全く漕ぎ手を集められない船もあった。コノンの船とその他彼に従う7隻の船およびパラロス号が人員を満たして共に出航したが、その他の全船はリュサンドロスが陸地近くで捕獲した。ほとんどの人間が陸地で捕虜とされたが、小さな要塞に逃げ込んだ者もいた。

29 コノンは9隻の船と共に逃げたが、アテナイ軍の兵力が完全に壊滅されたのを知ると、ランプサコスのアパルニス岬に上陸すると要塞を制圧して、そこからリュサンドロスの艦船の主帆を奪い、自らは8隻を率いてキュプロスのエウアゴラスのもとへ航行した。一方、パラロス号は事件を知らせるためアテナイへ向かった。

30 リュサンドロスの方は、艦船、捕虜およびその他すべてを伴ってランプサコスへと戻った。彼が捕獲した将軍の中にはフィロクレスとアデイマントスその他がいた。彼がこのことを達成した日、ミレトス人の海賊テオポンポスをラケダイモンに事を告げる使者として送り、この者は3日目に到着して報告を果たした。

31 その後、リュサンドロスは同盟国を集め、捕虜について議論するよう命じた。そこでは、アテナイ人に対して多数の非難がなされた。すでになされていた違法行為や、海戦に勝利したならなすべく投票決議したこと、すなわち捕虜とした者全員の右手を切り落とすといったことや、さらに彼らが2隻の三段櫓船、コリントス船とアンドリア船を捕獲したとき、その乗組員全員を船から突き落としたこと——彼らを殺したアテナイ人の

將軍はフィロクレスであった——などが非難された。32 その他にも多くのことが語られ、捕虜はアテナイ人であればアデイマントスを除いて処刑することを決議した。というのは、アデイマントスは民会で手の切斷についての投票決議にただ一人反対したからである。しかし、船を裏切ったとして彼を非難する者たちもいた。リュサンドロスは、アンドリア人とコリントス人を突き落としたフィロクレスに、まず、ギリシア人に違法行為を働いた最初の男は何を受けるのが相應しいか、と問いかけた上で、彼の喉を切った。

第2章

1 リュサンドロスはランプサコスでのことを片付けると、ビュザンティオンとカルケドンへと航行した。人々は彼を受け入れたが、休戦協定を結んでアテナイ駐留軍を去らせたあとだった。アルキビアデスのためにビュザンティオンを裏切った者たちは、その時黒海へと逃れたが、後にアテナイへ来てアテナイ市民となった。2 リュサンドロスは、アテナイ駐留軍とその他にどこかでアテナイ人を見つければ、アテナイへ送り出し、アテナイへのみは安全な航海を与えたがその他へはそうしなかった。彼は、町とペイライエウスに多くの者が集まれば集まるほど、食糧品の欠如が早く生ずることを知っていたのである。ビュザンティオンとカルケドンの統治官としてラコニア人ステネラオスを残し、彼自身はランプサコスに戻って船の修繕に着手した。

3 アテナイでは夜パラロス号が到着して災禍が知らされた。嘆きの声がペイライエウスから長壁を通して町へと広がった。ある者からある者へ知らせが伝わった。そのためその夜は誰も眠れなかった。死んだ者たちだけでなく、それ以上に彼らは自分たち自身のことを嘆いた。攻囲戦で力を武器にメロス人やラケダイモンからの移住者に強制したこと、ヒスティアイア人、スキオネ人、トロネ人、アイギナ人、その他多くのギリシア人になしたこと、それと同じことを蒙るであろうと彼らは考た。4 翌日民会が開かれ、そこで以下の決議がなされた。一つを除いて港を封鎖するこ

と、城壁を修繕すること、守備隊を置くこと、その他攻囲戦に向けて国家はあらゆることを準備すること、とである。彼らはこうしたことに専念していた。

5 一方、リュサンドロスはヘレスポントスから200隻の船でレスボスに到着し、その地のミュティレネはじめその他の国の状況を立て直した。トラキア地方には10隻の船と共にエテオニコスを派遣し、エテオニコスはその地のすべてをラケダイモン側に付くようにさせた。6 海戦後すぐに全ギリシアがアテナイから離反したが、サモス人は別だった。彼らは貴族たちを殺害したあと祖国を占領していたのである。

7 リュサンドロスはその後、デケレイアのアギスとラケダイモンとに使いを送って、200隻の船を率いて行く、と告げた。ラケダイモン人とアルゴス軍を除くペロポネソス軍は全軍を挙げて出陣し、もう一人のラケダイモン王パウサニアスが指揮をとった。8 全軍が集められると、彼は彼らを率いてアテナイへと向かい、アカデメイア（いわゆる体育訓練場）で野営した。9 リュサンドロスはアイギナに到着すると、彼が集め得た限りのアイギナ人に、国を返してやった。ミレトス人にも同様にし、その他自らの祖国を奪われた者たちにそうしてやった。その後、サラミスを荒らし、150隻の船をペイライエウスの前に停泊させると、船が中に入るのを阻止し始めた。

10 アテナイ人は陸からも海からも包囲されて何をなしたらいいのかわからなかった。彼らには船も同盟軍も食糧もなかった。自分たちが復讐のためではなく、傲慢さのためになしたこと、小さな国の人間にラケダイモン人と同盟しているというだけの理由で犯した不正と同じ目に遭うより他に救われようがないと認識するようになった。11 そのため市民権剥奪された者に市民権を復活させつつ耐えていたのである。市内では餓えから多くの者が死につつも和解について語ることはなかった。しかし、ついに食べ物完全に尽きてしまうと、城壁とペイライエウスを保持したままラケダイモン人と同盟関係に入ることを望み、アギスのもとに使節を送ってその条件で協定を結ぶよう申し入れた。12 アギスは彼らに、自

分には権限がないから、ラケダイモンへ行けと命じた。使節がこのことをアテナイ人に報告すると、アテナイ人は彼らをラケダイモンへと派遣した。

13 彼らがセラシア（ラコニアの近く）に到着し、監督官たちが彼らの主張すること——それはつまりアギスのもとで言ったことであった——を知ると、直ちに彼らに去れと言った。そしてもし何らかの平和を望むのなら、もっとましなことを協議してから来るようにと申し渡した。 14

使節が故国に戻り、国家にこのことを報告すると、落胆が皆を襲った。奴隷に売られるのだ、と人々は考えた。そして代わりの使節を送るまでも多くの者が餓えから死んでしまおうとも考えた。 15 しかし、城壁の破壊については誰も提言しようとはしなかった。アルケストラトスが評議会でラケダイモン人の提案している条件で彼らと和平を結ぶのが最善策だと発言して、拘束されたからである。ラケダイモン人は長壁の両端 10 スタディオンを破壊することを提案していた。しかし、このことについて協議することを許さず、との投票決議が成立してしまった。

16 このような状況の中で、テラメネスは民会で、自分をリュサンドロスのもとに派遣することを望むなら、赴いてラケダイモン人が国家を奴隷に売り払おうと思って城壁に執着しているのか、あるいは信義を確認するためなのかを判別してこよう、と発言した。しかし、派遣されると彼は 3 ヶ月以上をリュサンドロスのもとで過ごし、アテナイ人が食糧の欠乏の故に誰が言う何であれ賛成するようになるのを見定めていた。 17 4 が月目に戻ると、民会で報告して言った。リュサンドロスが今まで自分を留めていたが、最後にラケダイモンに行けと命じられた、お前に問われたことについて自分には権限がない、監督官が持っているのだから、と言うのだ、と。その後、ラケダイモンへの 10 人の全権使節の 1 人に彼は選ばれた。 18 一方、リュサンドロスは、何人かのラケダイモン人と共に、アテナイ人亡命者アリストテレスを監督官のもとに使わし、戦争と平和について諸君らが権限を持っているとテラメネスに答えた、と報告させた。

19 テラメネスらの使節がセラシアに到着すると、いかなる条件で来たのかを問われた。彼らは、平和について全権を持って来たと答えた。そ

の後、監督官は彼らを呼ぶように命じた。彼らが来ると集会が開かれ、そこではコリントス人とテバイ人を先頭にその他のギリシア人も、アテナイ人と休戦協定を結ぶことに反対し、完全破壊を主張した。20 ラケダイモン人はギリシアが最大の危機に遭ったときに大きな功績を挙げたギリシア人国家を奴隷にすることなど出来ない、と言って、つぎの条件で平和条約を結ぶよう提案した。すなわち、長壁とペイライエウスを破壊すること、12隻を除いて艦船を引き渡すこと、亡命者を帰還さすこと、ラケダイモン人と同じ者を敵、味方と見なすこと、ラケダイモン人の導くところ陸でも海でも従って行くこと、以上である。

21 テラメネスとその使節一行はこれをアテナイに持ち帰った。町に入った彼らを多くの民衆が取り囲んだ。何も得るものがなく彼らが帰ったのではないかと恐れたのである。というのも、餓えから死んで行く者の多さに一刻の猶予もならなかったからである。22 次の日、使節はラケダイモン人が平和条約締結の条件としたものを報告した。テラメネスは最初に告げて言った、ラケダイモン人に従い、城壁を壊さなければならない。ある者は彼に反対したが、より以上の者が賛成し、平和を受け入れることが決議された。

23 その後、リュサンドロスがペイライエウスに入港し、亡命者たちが戻り、城壁を笛吹き女の音楽に合わせて非常に熱狂の中で破壊した。彼らは、この日がギリシアの自由が始まる日だと信じていた。

24 かくてこの年は終わったが、この年の半ばにはシュラクサ人ヘルモクラテスの子ディオニュシオスが、シュラクサ軍によりカルタゴ軍が敗れた戦いのあと、僭主となった。カルタゴ軍はアクラガスを食糧の欠乏に追い込み占領したが、シケリア人はこの国を見捨てた。

第3章

1 翌年〔この年オリュンピアでは1スタディオン競技でテッサリア人クロキナスが勝利し、スパルタではエウディオスが監督官、アテナイではピュトドロスがアルコンであったが、アテナイ人はこの者が寡頭政下で選

ばれたため、この年をこの者の名前で呼ばず、アルコン不在の年と呼んでいる。この寡頭政成立の顛末は以下のようなものである。] 2 民会で30人を選出し、その者たちが父祖の法を共同起草してそれに従って国家を運営することと決議された。そして以下の者たちが選出された：ポリュカレス、クリティアス、メロピオス、ヒッポロコス、エウクレイデス、ヒエロン、ムネシロコス、クレモン、テラメネス、アレシアス、ディオクレス、ファイドリアス、カイレレオス、アナイティオス、ペイソン、ソフォクレス、エラトステネス、カリクレス、オノマクレス、テオグニス、アイスキネス、テオゲネス、クレオメデス、エラシストラトス、フェイドン、ドラコンティデス、エウマテス、アリストテレス、ヒッポマコス、ムネシテイデス。

3 こうしたことがなされると、リュサンドロスはサモスへ戻り、アギスはデケレイアから歩兵部隊を撤退させ、兵士たちをそれぞれの国に去らせた。

4 この時期の日蝕があった頃、フェライのリュコフロンは、テッサリア全体を支配したいと望んで、彼に反対するテッサリア人、ラリッサ人その他を戦場で破り、多くの者を殺した。5 同じ頃、シュラクサの僭主ディオニュシオスもカルタゴ人に敗北し、ゲラとカマリナを失った。その少し後、シュラクサイに共同住居していたレオンティノイ人もディオニュシオスとシュラクサイ人から離反し、彼らの国に戻った。その直後、シュラクサイ軍騎兵がディオニュシオスによってカタネに派遣された。

6 サモス人はリュサンドロスによって完全に包囲され、最初は同意しようとしなかったが、リュサンドロスが攻撃をかけようとする段になって、自由人は各自外套1枚を持って去り、その他は引き渡すことに同意した。こうして彼らは去った。7 リュサンドロスはかつての市民に国家とその中にあったものすべてを引き渡し、10人の統治官を設置して監視を委ねた上、同盟国艦隊を各国に帰還させ、8 自分はラコニアの艦船と共にラケダイモンに戻った。その際、捕獲した船の飾りと12隻を除いたペライエウスからの船、諸国から彼への個人的贈り物として与えられた冠、キュロスが彼へ戦費として与えた負担金の中で残った470タラント、

その他戦争の中で獲得したあらゆるものを持ち帰った。 9 これらすべてを彼は夏の終わりに引き渡した。

〔この時点で戦争は28年と6ヶ月を経過していた。この間、以下の者たちが監督官となった。まず、開戦時の監督官はアイネシアスで、エウボイア占領後の30年和約成立から15年後のことであった。彼の後に以下の者たちが続いた。 10 プラシダス、イサノル、ソストラティダス、エクサルコス、アゲシトラトス、アンゲニダス、オノマクレス、ゼウクシポス、ピテュアス、プレイストラス、クレイノマコス、イラルコス、レオン、カイリラス、パンテシアダス、クレオステネス、リュカリオス、エペラトス、オノマンティオス、アレクシッピダス、ミスゴライダス、イシアス、アラコス、エウアルキッポス、パンタクレス、ピテュアス、アルキュタス、エウディオス。最後の者の時にリュサンドロスがすでに語ったことをなして故国に戻ってきたのである。〕

オクシュリュンコスの『ヘレニカ』

カイロ・パピュルス

<第1列>

・・・城壁を攻撃すること・・・最大数の三段櫓船・・・一方別部隊はエフェソスの土地を・・・全軍を出立させ・・・町に・・・エフェソス人はラケダイモン人と共に・・・彼らに・・・彼らはアテナイ軍中パシオン率いる一隊は見なかったが——というのも彼らは遠く離れており、別部隊より長い道を行軍中だったのである——、トラシュロス麾下の部隊が到着したばかりなのを発見し、コレソスという港の近くで衝突した。彼らには同盟軍として・・・助けた者たちを最も信頼できるものとして持っていた。……〔キリ〕ピ〔アイノス〕平野に住む人々の……。その後、アテナイ人将軍トラシュロスは、町に着くと、兵士たちの幾人かを攻撃隊として残し、

残りを高く越え難い山へと率いていった。・・・一部は町の外に、一部は内に・・・。エフェソス人を率いていたのはティマルコスとポシクラテスであった。

<第2列>

・・・トラシュ〔ロス〕・・・強い地方に・・・彼らのもとに逃れた・・・軍を率いて突進した。敵が退却するのでアテナイ軍は熱心に追いかけて、力によって町を占領しようとした。エフェソス人を率いていたティマルコスとポシクラテスは自軍の重装兵を呼び戻した。アテナイ軍が近づくと・・・軽装兵は再び難路から戻り・・・と共に攻撃した・・・。しかし・・・の・・・の故に・・・短期間に・・・を試みた者たちは・・・を襲った。驚いて・・・を解いた・・・無秩序に・・・船に・・・逃れた。彼らのうち海への道を退却した者たちは、安全に進んだ。しかし上の道を行った者たちは・・・破滅した・・・

<第3列>

・・・兵士たちの・・・によって・・・シュラクサイへ・・・明白なことの・・・ヒッパルコスを・・・かの者・・・兵士たちに・・・エフェソスの・・・残った者たち・・・危険で・・・分かれた・・・

フィレンツェ・パピュルス

A断片

<第1列>

1 ・・・400人・・・前向きとなり、ラケダイモン人は戦列を組んで山へと退却した。しかし、アテナイ人兵士たちは彼らを追おうとせず、メガラ人について・・・町へ続く道で・・・彼らの多くを打ち倒した。その後、

その地を荒らし休戦を結んでメガラ人とラケダイモン人（彼らの約20人が死んだ）の死体を返還し、戦勝碑を建てた。これらのことをなすと彼らは故国へと戻った。

- 2 アテナイ人は戦いのことを知ると将軍たちに怒り、苛酷な態度をとった。彼らは将軍たちが早急に危険を避け、国家全体を危険にさらしたと考えたのである。しかし、勝利については大いに喜んだ。何故なら、ビュロス〔以来〕これまで一度もラケダイモン人に勝利したことがなかったからである。

<第2列>

・・・金・・・強制し・・・個人・・・少なからぬ・・・それから・・・
慣例・・・ペダリトス・・・支配し・・・誰であれ・・・権力・・・維持
した・・・アテナイ人の・・・トゥキュディデスもまた・・・ペダリトス・・・
直ぐに・・・

B断片

<第3列>

・・・日後・・・孤立した・・・取り去られた・・・大王の・・・島々
に・・・クラゾメナイ人に・・・最高・・・

<第4列>

- 1 ・・・島人（ペロポネソス人？）・・・慣れていたように・・・船を送る・・・
10隻の最速船に船員を乗り組ませると、残りの船には敵が陸から遠く
離れるまで止まっているよう命じた。彼自身は、・・・エフェソスへ先頭
に立って航行し・・・彼らを自分の味方とさせる・・・
- 2 リュサンドロスは彼らを見ると、3隻を直ちに海に入れた。それらの
船はかつて・・・アンティオコスを沈めた・・・そして破壊した・・・
アテナイ船の中で一緒に航行していた船の者たちは恐怖を感じて直ちに
反転して逃げた。彼らは全力で海戦を戦うつもりはなかったのである。

リュサンドロスは全艦船を海に入れると敵船を追跡した。

- 3 アテナイ人の残りは、ラケダイモン艦船が出航し、自らの 10 隻を追跡しているのを見ると、素早く船に乗り組み、自国の船の救助に急いだ。しかし、敵がすでに早く動いていたので、敵の来る前に艦船に全員を乗り組ませることが出来なかったが、ほとんどの者をコロフォン人の港から少し進ませ、先行の船を・・・、彼らは戦う前に混乱に陥った・・・そして混乱の内に敵から退却した。一方、ラケダイモン人はアテナイ艦隊が退却しているのを見ると攻撃を敢行し、それらを破壊し、22 隻を捕獲した。そして残りをノティオンに包囲した。
- 4 彼らはこうしたことをやり遂げると、戦勝碑を町の港の近くに建てた後、反転して引き返した。アテナイ人はすぐには沈黙していたが、・・・が過ぎると・・・3 日間世話をした・・・

C断片

<第5列>

- 1 ...慣れている...同意を直ちに...亡命者を...
- 2 というのも彼と共に...デメテルとコレの神殿で、それは壁...によって森に...なっていた...命ぜられると夜間しばらくの間森に身を隠して静かにしていた。アテナイ人の監視が立つと、壁を越えてロープを垂らし、監視を引き継いだということの徴を声をかけるなり石を投げるなりして知らせた。するとまずそのミュンドス人が森から出て来て、監視から垂らされた書き付けがあったならそれを受け取って保管し、ついでこの者が別の書き付けがあればそれをロープにくくりつけた。
- 3 ...壁...監視...

D断片

...秩序...若干多くの...馬に...

テオポンポスの『ヘレニカ』

断片5 無名氏『トゥキュディデス伝』5

記述はキュノスセマでの海戦で止まっている。・・・その後のことを書くのは別の者たちに残された。すなわち、クセノフォンとテオポンポスである。それに続く戦いが存する。キュノスセマでの第2の海戦も——それについてはテオポンポスが語っている——、キュジコスでの戦いも——それにはトラシュプロス、テラメネス、アルキビアデスが勝利した——、アルギヌサイの海戦も——そこではアテナイ軍がラケダイモン軍を破った——、アッティカの不幸の総決算、アイゴスボタモイでの海戦も——そこでアテナイ軍は船を喪失し、それに続く希望も失った——（トゥキュディデスは書いていない）。アテナイ人の城壁は破壊され、30人僭主が打ち建てられ、多くの不幸な目に国家は遭ったのであるが、その不幸はテオポンポスが詳述している。

断片6 デモステネス『第7番』39への古註

カルディアは、テオポンポスが『ヘレニカ』の第1巻で言っているように、ケルソネソスのメラスと呼ばれる川の辺りにある。

断片7 ビュザンティオンのステファノス s.v. Χρυσόπολις

クリュソポリス：・・・テオポンポスが『ヘレニカ』第1巻で。「彼らは残りの兵士と共にクリュソポリスを占領しようと望んでカルケドンとビュザンティオンへ航行した。」

断片8 ハルボクラティオン s.v. Πεδάριτος

ペダリトス：イソクラテスが『アルキダモス』の中で。ラケダイモン人から派遣された者の中でこの者は、統治官であり、テオポンポスが『ヘレニカ』第2巻で言うように、立派な者の1人である。

断片 20 アテナイオス『食卓の賢人たち』 543BC

パウサニアスとリュサンドロスの贅沢な暮らし振りはほとんどすべての者が調査言及している・・・しかし、テオポンポスは『ヘレニカ』の第10巻でリュサンドロスについて反対のことを言っている、「勤勉な人物で、私人にも王にも奉仕することが出来た。自制心を持ち、あらゆる快楽に打ち克った。ほとんどすべてのギリシアの支配者となったが、どの国においても愛の快楽に陥ったとか、飲んだくれたとか酒乱ぶりを発揮したとかということとは現れないであろう。」

附録：クセノフォン『ヘレニカ』構成表

巻	章	年	題	節	内 容	叙述形態
1	1	411	アテナイとスパルタの再戦	1	アテナイからテュモカレスが少数の艦船を率いてやって来てスパルタ人と再び戦闘に入り、アゲサンドリダス麾下のスパルタ軍が勝利する	説明
1	1	411冬の初め	ヘレスポントス…アビュドスの戦い	2	ドリエウスがロドスからヘレスポントスにやって来、これに気づいたアテナイ軍は対抗しようとしたが、彼はこれを避けてロイティオンに船を陸揚げしようとした	説明
				3	アテナイ軍が接近すると、船からも陸からも戦ったので、アテナイ軍はマデュトスへ引き返した	説明
				4	スパルタ軍提督ミンダロスは、この海戦を見てドリエウス応援のために三段艦船を出航させる	説明
1	1	411冬の初め	ヘレスポントス…ミンダロス、アルキピアデス、ファルナバゾスの登場	5	アテナイ軍はそれを迎え撃ち、アビュドスで朝から夕刻まで海戦が行われる、その途中にアルキピアデスが18隻を率いてやって来た	説明
				6	ペロポネソス軍はアビュドスへと退き、ファルナバゾスが彼らの援助にやってきた、馬に乗って出来る限りまで海に入り、騎兵と歩兵を激励した	説明
				7	ペロポネソス軍は船で密集隊を作り、岸に沿って列を作って戦った。アテナイ軍は敵船30隻を捕獲し、破損船を回収してセストスへと戻った	説明
1	1	411/0冬	セストスからの資金調達の動き、トラシュロスのアテナイ派遣	8	セストスから40隻を残して全艦船が資金調達のためヘレスポントスの外へと出て行った。トラシュロスは事態の報告と艦船要求のためアテナイへ。	説明
1	1	411/0冬	ティッサフエルネスとアルキピアデス	9	ティッサフエルネスがヘレスポントスにやって来、そこにアルキピアデスが1隻の船と贈り物をもって尋ねてきたが、ティッサフエルネスは大王がアテナイ人と戦うよう命じていると言って彼をサルデイスに拘束してしまった	説明
				10	30日後、アルキピアデスはカリアに拘束されていたマンティテオスと共に馬を調達し、夜にサルデイスからクラズメナイへと逃れた	説明

				11	セストスにいるアテナイ軍はミンダロスが60隻を率いて攻撃しようとしているのを知り、カルディアへ逃れる、その地にアルキピアデスも合流するが、ペロポネソス軍がアビュドスからキュジコスに向かっているのを知ると陸路セストスへと赴き、艦船をそこに回航させるよう命じた	説明
			セストスからキュジコスへ・・・ア ルキピアデス麾下 のアテナイ海軍、トラ テラメネス、トラ シュプロロスを加え ながら進む	12	艦船が到着し海戦に打って出ようとした時、テラメネスがマケドニアから20隻を率い、さらにトラシュプロロスから20隻を率いて到着した。両者に資金を徴収してきていた。	説明
1	1	410初め		13	アルキピアデスはこれらの者を主帆を取り除かせた上で付き従わせて、パリオンついで翌日プロコネソス島へ	説明
				14	アテナイ軍は、ここでミンダロスがキュジコスにおり、ファルナバズスが歩兵を率いていることを知る→翌日アルキピアデスは集会を開き、海戦、陸戦、包囲戦が必至である、「なぜならわれわれには金がないが、敵は大王からの豊富な資金があるのだから」	説明
				15	アルキピアデスは前日、味方の艦隊の規模を敵軍に通報できないよう、すべての船を小舟に至るまで集結させ、海を渡ろうと捕まった者は処刑すると布告した	説明
				16	集会後、豪雨の中出航→キュジコスに着くと晴れ、敵艦60隻がはるか沖合で演習中であり、敵艦は自分たちの艦隊によって港から分断されているのに気づく	説明
1	1	410初め	キュジコスの戦い	17	ペロポネソス軍は敵が以前より数が多く、港に近いことを知ると、陸へと逃げた→船を密集して停泊させ、向かってくる敵船と戦った	説明
				18	アルキピアデスは20隻と共に迂回して上陸→これを見たミンダロスも上陸し戦死、彼に従った者は逃亡→アテナイは敵船すべてをプロコネソスに曳航、ただしシュラクサイは艦船を焼いてしまった	説明
				19	キュジコスは、ペロポネソス軍とファルナバズスが去ったのでアテナイ軍を迎え入れた	説明

1	1	410初め	アルキビアデスの活動	20	アルキビアデスはそこに20日間とどまり、キュジコス人から多くの金を集め、その他には何らの害もなさずプロコネロスへと立ち去った→そこからペリントスとセリュンブリアへと航海した	説明
				21	ペリントス人は艦隊をしないに受け入れたが、セリュンブリア人は受け入れず、金を与えた	説明
				22	そこからカルケドニアのクリュソポリスへ行って要塞とし、税関を設け黒海から出ようとするとその船から10分の1税を徴収し始めた→テラメネス、エウモコスの二人の将軍と30隻の艦船を残し、その地と出て行こうとする船を管理させ、敵には出来る限りの害を与えようとした→その他の将軍はヘレスポントスへ戻った	説明
1	1	410初め	スパルタ側書簡	23	ミンダロスの副官ヒッポクラテスがスパルタに送った書簡が途中で押さえられアテナイにもたらされた→そこには「木材（船）は失われた、ミンダロス戦死、人は飢餓にあり、何をすべきかわからず」とあった	説明・直接引用
				24	ファルナバゾスはペロポネソス全軍とその同盟国軍を鼓舞して、王国には木材は大量にあるから生きていさえすば心配することない、と言い、各人に外套と2ヶ月分の食費を与えた→水夫を重装兵とし、沿岸地帯の守備隊とした	説明・間接話法
1	1	410	ファルナバゾスのペロポネソス軍激励	25	また、諸ボリスから将軍と三段艦船長を呼び出し、失ったのと同じだけの三段艦船をアンタンドロスで建造するよう命じ、金を与え木材はイダ山から採るように言った	説明
				26	艦船建設中、シュラクサイ軍はアンタンドロス人と協力して城壁の一部を完成→アンタンドロス人によって恩恵者かつ市民として扱われるようになる→ファルナバゾスはカルケドンへ救援に赴く	説明
1	1	410	シュラクサイの将軍たちの追放	27	シュラクサイの将軍たちに追放刑に処されたとの知らせが届く→兵士たちを召集して、ヘルモクラテスが自分たちの追放が如何に不法であるかを訴える→今後も職務に精励すること、当面の指揮官を選ぶよう命ずる	説明
				28	兵士たち、ことに三段艦船長、乗船重装兵、操縦兵はこれに反発→将軍は祖国と戦うことは出来ないとし、弁論：「諸君が最強の編隊を形成しているのはわれわれの式方と諸君の熟意のゆえである」	説明・直接話法

			29	将軍がその地にとどまっている間に代わりの将軍が到着→三段權船長のほとんどは、自分たちがシュラクサイに戻ったら再び将軍たちを呼び戻すと誓う→追放された将軍たちを称えつつ彼らを希望の場所に送り出す	説明
1	1		30	ヘルモクラテスに親炙していた者たちは彼の思いやり、熱意、親しみやすさを懐かしがった	人物評価
		ヘルモクラテス	31	こうした理由から、ヘルモクラテスは会議で最良の話し手、助言者と見られ、評価が高かった→ティッサフエルネスをスパルタで告発してアステオコス証言によって真実を語っていると認められ、フェルナバゾスを訪れると彼が求める前に金を与えられ、シュラクサイ帰還のための傭兵と三段權船とを用意できた→その間にシュラクサイからの将軍がやってきて船と軍隊を引き継いだ	人物評価
1	1	タソス内乱	32	タソスで内乱が起こった→親スパルタ派の者がスパルタ人統治官エテオニコスと共に追放された→この件にティッサフエルネスと共に責任ありとされたラケダイモン人パシッピダスはスパルタから亡命した→パシッピダスが同盟国から集めた艦隊指揮のためクラテシッピダスが派遣され、キオスで引き継いだ	説明
			33	アギスがデケレイアから出撃しアテナイの市壁までやって来た→トラシユロロスがアテナイ人とその他市内にいる者たちを率いて市壁の外に出、リュケイオンの近くに陣形を取らせた	説明
1	1	アッティカにおけるアギスの決断	34	アギスはこれを見ようとすぐに退却した→殿にたった者の少数がアテナイの軽装兵によって殺された→このことがあって、アテナイ人はトラシユロロスがやってきた目的であった援軍、千の重装兵、百の騎兵、三段權船50隻を決議した	説明
			35	アギスは多くの穀物船がペイライエウスに入ってくるのを見て、海路やってくる穀物を押さえるのではなければ、アテナイ人を土地から閉め出している効果がない、と語った→ビュザンティオンのプロクセノス、クレアルコスをカルケドンとビュザンティオンに派遣するのが最善策である、と言った	説明・問接語法

				36	これが受け入れられると、クレアルコスはメガラ人と同盟国人とを乗り組ませた15隻の船で出航した→そのうち3隻は9隻のアテナイ船によって破壊されたが、その他はセストスへ逃れ、そこからリュザンティオンに入った	説明
1	1	409?	この年	37	そしてこの年が終わったが、この年はハンニバルの下のカルタゴ人が10万の兵を率いてシケリアに侵攻し、3ヶ月の間にセリノスとヒメラのポリスを占領した、ということがあった	説明
1	2	409	翌年	1	翌年、アテナイはトリコスを防壁で固め、トラシュロスは決議された艦船を受け取り、海兵5千人分の櫓を作って夏の初めにサモスへ向かった	説明
				2	そこに3日間留まった後、ピュゲラに向かいその城壁を攻撃→ミレトスからの援軍がピュゲラ人を助け、散開したアテナイ軽装兵を追撃した	説明
1	2	409	ピュゲラの戦い	3	アテナイ側は楯兵と重装兵2部隊が駆けつけ、ミレトスからの援軍のほとんどを殺し、約200の櫓を取り戦勝碑を建てた	説明
				4	アテナイ軍は翌日ノティオンに行き、ついでコロフォンに進み降伏させた→その夜の内にリュディアに侵攻し、多くの村落に火をかけ、金品、奴隷その他の略奪品を取る	説明
1	2	409	リュディア遠征	5	アテナイ人が私的略奪のために陣営から出てきたとき、この地を治めていたペルシア人スタゲスは敵騎兵が支援にきにもかかわらず、で1人を生け捕りにし、7人を殺した	説明
				6	その後トラシュロスはエフェソス攻撃をもくろんで兵を海に戻した→テイッサフェルネスはこれを知ると、大軍を召集し、騎兵を派遣して皆にアルテミスを守るためにエフェソスに駆けつけよとふれさせた	説明
				7	トラシュロスはリュディア侵攻17日にエフェソスへ航行し、重装兵をコレッソスあたりに、騎兵、楯兵、乗員重装兵とその他すべてを都市の対岸の沼地に配置→夜明けとともに2部隊を前進させた	説明
				8	エフェソス人、ティッサフェルネスの率いる同盟国軍、シュラクサイ軍（以前からの20隻と新たにやってきた5隻）、セリヌス軍2隻がこれに対応した	説明

1	2	409	エフェソスの戦い	9	これらの軍はまずコレッソスの重装兵に当たった→彼らを追い払い約 100 人を殺しその他を海に追った→ついで沼地からのアテナイ軍に向かった→このアテナイ軍も敗走し、約 300 人が死んだ	説明
				10	エフェソスはこの地とコレッソスとに戦勝碑を建てた→シュラクサイ人およびセリヌス人には多くの褒賞を与えられた→彼らは免税特権を持ってエフェソス居住が認められた→セリヌス人には母国が減ばされていたので、エフェソスの市民権を与えた	説明
				11	アテナイ軍は休戦協定を結んで遺体を引き取り、ノティオンに戻り、遺体埋葬の後レスボスとヘレスポントスへ向かった	説明
1	2	409	レスボスでの活動	12	アテナイ艦隊はレスボスのメテュムナに停泊中、エフェソスからのシュラクサイ艦隊 25 隻を発見し出撃、4 隻を捕獲してその他をエフェソスまで追った	説明
				13	トラシュロスは捕虜を全員アテナイへ移送、ただしアテナイ人アルキビアデスは石打で死刑に→そこからセラストスへ行き別の部隊と合流、さらに全軍はランブサコスへ	説明
1	2	409 冬	アッティカでのシュラクサイ人逃亡	14	ペライエウスの石切場に拘束されたシュラクサイ人捕虜は石に穴を開けて夜陰に乗じてデケレイアへ逃亡	説明
				15	ランブサコスでアルキビアデスが全体を統合しようとしたが、古くからの兵はトラシュロスと共に着いた者たちと一緒にしようとしなかった→彼らは敗北してきたが、自分たちは負けたことがない、という理由→しかし、全員でランブサコスで越冬することに	説明
1	2	409 冬	ランブサコスを拠点としたアテナイ軍の動き	16	アビュドスへ遠征したが、ファルナバゾスが援軍に来る→彼らは敗北し、逃走へ→アルキビアデスが、メナンドロス指揮下の重装兵 120 人と騎兵を率いて追撃するが、闇のため断念	説明
				17	この戦いの結果、兵士たちは互いに打ち解け合い、トラシュロス麾下の者たちを仲間に受け入れる→この冬、アテナイ軍は幾度か内陸は遠征し、ペルシア王の領土を荒らし回る	説明

1	2	409冬	スバルタ人の動き	18	同じ頃、ラケダイモシ人はマレアから逃亡したヘイロータイを協定を結んで自由とした→トラキニアのヘアクレイアでは、アカイア人が移住者を裏切ったため、ラケダイモシ人統治官ラボタスと共に700人の移住者が死んだ	説明
1	2	409	この年	19	こうしてこの年は終わった→この年はダレイオスから離反したメデア人が再び従うという事も起こった	説明
1	3	408	プロコネソス	1	翌年、春となりアテナイ軍は海路プロコネソスに向かった	説明
				2	そこからカルケドンとビュザンティオンに出撃→カルケドンは隣国のビテュニアのトラキア人に家財を預ける	説明
				3	アルキピアデスはビテュニア人のものに行き、カルケドンの家財引渡しを要求→よこさなければ攻撃すると言ったため、ビテュニア人は家財を引き渡す	説明・間接話法
1	3	408	カルケドン攻撃	4	アルキピアデス、ビテュニア人と協定を結んで戦利品を持って帰る→全員を動員してカルケドンを海から海へ、また川も同様に木の防柵で包囲した	説明
				5	スバルタ人統治官ヒッポクラテスが兵を率いて町から出撃→アテナイ人がこれに対峙して布陣すると、ファルナバゾスが包囲柵の外から歩兵と騎兵を率いて援軍に駆けつける	説明
				6	ヒッポクラテスとトラシロスは長時間交戦→アルキピアデスが援軍を率いてやって来る→ヒッポクラテス戦死し、彼の軍は町へ退却	説明
				7	ファルナバゾスは包囲柵のため道が狭く、ヒッポクラテスと合流できず、カルケドンのヘラクレルス神殿に退却	説明
				8	アルキピアデスはヘレスポントスとケルソネソスに軍資金調達のため赴く→他の將軍たちはファルナバゾスと協定を結んだ：ファルナバゾスがアテナイ人に20タラントンを支払い、アテナイの使節団をペルシア王の下に案内する	説明
				9	誓約を取り交わし、カルケドンはアテナイ人に以前と同じ額と未払い分とを払うこと、アテナイ人は使節がペルシア王の下から帰るまでカルケドン人に攻撃をしかけないこと、とした	説明

1	3	408	カルケドンをめぐ る協約・・・アテ ナイの権利回復	10	アルキビアデスは、この誓約の場におらず、セリュンブリア近辺にいた→ 彼はこの都市を占領すると、ケルソネソスからの全軍を率いてビュザン ティオンに来る	説明
				11	フェルナバゾスはアルキビアデスも誓言すべきとしてカルケドンで彼の 帰還を待っている→アルキビアデスは戻ると、フェルナバゾスが自分に 誓言するのだから、自分も誓いを立てないとする	説明・間接語法
				12	アルキビアデスはクリュソポリスでフェルナバゾスの使節たちに、ファ ルナバゾスはカルケドンでアルキビアデスからの使節に、それぞれ共通 の誓言をなし、私的に互いに友誼を交わした	説明
1	3	408	大王の下に赴くア テナイ人、スパル タ人使節	13	フェルナバゾスは立ち去る際、ペルシアの下に行く使節たちにキュジコ スで合流するよう命ずる→アテナイ人使節とラケダイモン人使節	説明
				14	フェルナバゾスが彼らを導いていた時、アテナイ人はビュザンティオン を包囲壁を築いて攻撃していた	説明
				15	ビュザンティオンにいたのは、ラケダイモン人統治官とペリオイコイ、新 市民、メガラ人、ボイオティア人	説明
1	3	408	ビュザンティオン 攻撃	16	アテナイは武力では何ともしえなかったため、ビュザンティオン人の何 人かに裏切りを説く	説明
				17	クレアルコスはどうしたことをする人間はいないだろうと考え、国のこ とはコイラタダスとヘリクソスに委ねてフェルナバゾスの下に行く→兵 の給与をもらい、船を集めるため	説明
				18	しかし、クレアルコスが出航すると、ビュザンティオン市民の中から裏 切ろうとする者が現れた	説明
				19	その一人アアナクシラオスはその後ラケダイモンでこの背信行為のゆえに 死罪に問われたが、弁明し放免された	説明
1	3	408	市民の裏切りによ りアテナイ勝利	20	裏切り者は手筈を整え、夜間門を開いて敵の軍勢とアルキビアデスを呼 び入れた	説明

			21	ヘリクソスとコイラタダスは事態に気づかず、全軍を率いてアゴラへ行 った→しかし、敵が至る所を押さえていたため、降伏する以外なかった	説明
			22	彼らはアテナイに送られたが、ペイライエウスで上陸する際コイラタ ダスは群衆に紛れて逃走し、無事デケレイアへと逃れた	説明
1	4	408/7冬	1	ファルナバゾスはフリュギアのゴルディオンで越冬していたが、この地 でビュザンティオンの出来事を知る	説明
1	4	407春の 初め	2	ファルナバゾス一行がペルシア王の下に向かっていた時、帰還途中のラ ケダイモン人使節団と会う→彼らは要求するすべてをペルシア王から得 ることが出来たと言った	説明・間接話法
			3	一行はまたキュロスとも会った→キュロスはペルシア王の封印のある、沿 岸地域の全部族に宛てた手紙を持つ→そこにはキュロスを「主人」とし て使わすと言われてあった	説明・直接引用
			4	アテナイ人使節はキュロスに会うと、一層ペルシア王の下に行きたい、さ もなければアテナイに帰りたいと考えた	説明
			5	キュロスはファルナバゾスに、使節団を引き渡せ、さもなければ彼らを アテナイに帰すなどと言った→これは経過状況をアテナイ人に知られたく ないためであった	説明・間接話法
1	4	407春の 初め	6	ファルナバゾスは、使節団にペルシア王の下に案内すると言ったり、故 国へ送り返してやると言ったりして、彼らを引き留めていた	説明・間接話法
			7	3年経つとファルナバゾスはキュロスに使節団を解放してもよいか尋ね る→使節をアリオバルザネスの下に送り、彼らに付き添うように命ずる →アリオバルザネスは彼らをミュシアのキオスまで案内し、使節団は他 のアテナイ軍に合流するためそこから出航した	説明・間接話法
			8	アルキピアデスはサモスへ出航し、そこから 20 隻の船と共にカリアのケ ラモス湾に向かい、そこで 100 タラントンを集めるとサモスに戻った	説明
1	4	407	9	トラシユプロスは 30 隻の船を率いてトラキアへ行き、ラケダイモンへ離 反した地域を制圧した→その中には戦争と内乱と飢饉に苦しめられてい たタソスも含まれていた	説明

				10	トラシュロスはその他の軍を率いてアテナイへ→彼が戻る前にアテナイ人は將軍を選出していた→依然追放中のアルキピアデス、アテナイを離れていたトラシュブロス、故国にいるものの中からコノンを	説明
				11	アルキピアデスは金を持ち、30隻の船を率いてサモスからバロスへ行き、そこからギュテイオンに行った→ラケダイモン人が建設中であると聞いた30隻の船を偵察に、また祖国が自分の帰国をどのように考えているかを見るため	説明
				12	彼らが好意的であり、自分を將軍に選んだことを、また友人たちが個人的に召喚してきたのを見て、ペイライエウスへ入港→その日はブリュンテリア祭の日で、アテナ女神像は覆われていた→それを彼にとっても国にとっても不吉なことと考える者たちもいた→アテナイ人は誰もこの日に重要なことに着手しようとしなかったというのである	説明
				13	彼が入港すると多くの者が彼を見に集まる→ある者たちは、彼は最高の市民であるが、ただ一人不当に追放刑を受けた、と言った→別の者は、彼は彼より劣った者たちの犠牲者であるが、彼は自分自身の資産と国家権力によって国を富ませてきた、と言った	説明・間接話法
				14	また、彼らによれば、彼は秘儀冒流事件ですぐに裁判を受けようとしたが、敵対者たちがこの正当な要求を引き延ばし、彼が国外にいる間に追放処分にしてしまったのである	間接話法
1	4	407	アルキピアデス帰国と最高司令官選出	15	追放中、助けてくれる者もなく、敵に奴隷となることを強要され、毎日が命に奪われる危険に直面しながら、敵に仕えたのだ→彼は同胞市民や親族、国家全体が過ちを犯しているのを見ながら、追放の身にあって彼らを助けることが出来なかったのだ	間接話法
				16	変化や体制変革を求めるのはアルキピアデスの性格ではない→民主政下で同年齢の誰よりも優れ、年長の者よりも劣りもしなかったのだから→しかし、彼の敵は彼の逃亡以前と同じ者たちだ→違いは、彼らがひとたび権力を握ると最善の人を殺したこと、残ったのが彼らだけなので彼らは市民から愛された、なぜなら彼らの他に使える良い人物がいなかったからだ	間接話法

					間接語法
17					しかし、別の者たちは、彼のみが自分たちの過去の不幸の責任を持っている、将来における災難も彼が彼のみが原因となる、と言っている
18					アルキピアデスは岸近くに船を停泊させたが、敵を恐れてすぐには上陸しなかった→甲板に立って友人たちがいるかを見ていた
19					従兄弟のエウリュプトレモスなどがいるのを見ると上陸する→友人たちを従えてアテナイ市内に向かったが、それは彼を逮捕しようとする者がいた場合妨げるためであった
20					評議会や民会で自己を弁明し、自分は不敬を犯しておらず不当な扱いを受けたといったことを主張→誰も反論しなかった→彼は最高司令官に選ばれた→戦争のため海路行っていた秘儀のための行進を全兵力を率いて陸路行こうようにした
21					その後、1500の重装兵、150の騎兵、100隻の船を登録させる→帰還後3ヶ月後離反したアンドロロスに向かった→従ったのはアリストクラテスとアデイマントス
22	その後のアルキピアデス	407	4	1	アルキピアデスは軍をアンドロス領内のガウリオンに上陸させる→迎撃してきたアンドロス人を敗走させ、少数のアンドロス人とラコニア人を殺した
23					アルキピアデスはその地に戦勝碑を建て、数日後サモスに向かう→そこを拠点に戦争を続ける
1					ラケダイモン人はクラテシッピダスに代えてリュサンドロスを艦隊司令官に→彼はロドスで艦隊を引き継ぐとコス、ミレトス、さらにはエフェソスへ→キュロスのサルデイス到着まで70隻の船を率いてその地に滞在
2					キュロロスが到着するとラケダイモン人使節と共にキュロスの下に赴く→ティッサフェルネスの行動を批判しキュロロスに戦争に熱意を示してくれよう要望する

1	5			3	キュロスは父王がそう指示されたし、自らもそうすると答えた→自分は500タラントンを持ってきているし、それで足りない父のくれた金も使うし、それでも足りないなら自分の玉座の金銀を貨幣に鋳造する、と言った	間接話法
				4	使節はこれを称讃した→各海兵の日当を1アッティカ・ドラクマに定めるよう要請した→これによってアテナイ側の海兵は逃れてしまい、金を使うことが少なくなるといった	間接話法
				5	キュロスは、それは良い案かもしれないが、王の指示以外のことは出来ない、と言った→協定では、1隻につき1ヶ月30ムナは提供することになっっている、と言った	間接話法
				6	リュサンドロスはその席では黙っていた→しかし夕食後、彼に何を望むかと尋ねた時、「各海兵に給金1オボロスを追加して頂けたら」と答えた	説明・間接話法
				7	それから日当は4オボロスになった→またキュロスはそれまでの借金と1ヶ月分を前払いする→その結果はますます熱心になった	説明
				8	アテナイ人はこれを聞くと意気阻喪し、ティッサフエルネスを通じてキュロスに使節を送った	説明
1	5		アテナイ人使節とキュロス	9	キュロスは、しかし、ティッサフエルネスが頼んだにもかかわらず、これと会うことを拒絶した→ティッサフエルネスはギリシア人自身で戦わせてどれも強くなく、すべてが弱くするようにせよと言ったのであるけれど	説明・間接話法
1	5		リュサンドロス	10	リュサンドロスは自分の艦隊を編成すると、90隻をエフェソスに陸揚げして乾燥と修理を行いながら静観していた	説明
				11	アルキビアデス、フォカイア包囲のためヘレスポントスから出て来たと聞いてトラシュプロスの下に赴く→その際アテナイオコスに艦隊の指揮を委ね、リュサンドロスの艦隊に攻撃をしないよう指示した	説明
				12	アテナイオコスはノティオンから自分の船とさらに1隻を出しエフェソスへ入港しようとし、リュサンドロスの船の船先を航行した	説明

1	5	406	ノティオン の戦いと アルキピア の撤退	13	リュサンドロスは最初数隻を出して追跡したが、アテナイ軍がさらに多くの船で援軍に駆けつけると、全艦船の編隊を整えて攻撃した→アテナイ軍の方も残余の三段艦船を一斉に出した	説明
				14	海戦が始まり、ラケダイモン軍は編隊を組んで、アテナイ軍は散らばって戦った→アテナイ軍は15隻を失って敗走→アテナイ軍のほとんどは逃れたが、いくらかは捕虜となった→リュサンドロスは艦船を取り、ノティオンに戦勝碑を建てた→リュサンドロスはエフェソスへ、アテナイ軍はサモスへと向かった	説明
				15	アルキピアデスはサモスにやってくると全艦船を率いてエフェソスに向かい、港の前で編隊を組んで海戦を挑んだ→リュサンドロスは数において劣るため出撃しなかった→アルキピアデスはサモスに戻った→その後ラケダイモン軍はデルフィニオンとエイオンを取った	説明
				16	知らせが届くと本国のアテナイ人はアルキピアデスに怒りを向けた→彼の不注意と怠慢さによって船を失ったと考えたため→新たに10人の將軍を選んだ→コノン、ディオメドン、レオン、ペリクレス、エラシニデス、アリストクラテス、アルケストラトス、プロトマコス、トラシユロス、アリストゲネス	説明
				17	アルキピアデスは軍の中でも人気を失い、1隻の三段艦船に乗って自分の城塞のあるケルソネスへと去った	説明
				18	コノンがアテナイ民会の決議に従ってアンドロスからサモスへ行き指揮権を引き継いだ→アンドロスのコノンの後任にファノステネスが4隻の船と共に向かった	説明
1	5	406	コノンとファノ ステネス	19	ファノステネスはトゥリオイの三段艦船2隻にあって乗員もろとも拿捕→捕虜全員を拘束したが、指揮官ドリエウスは饑れんで身代金も取らずに解放した→ドリエウスはロドス生まれであるが、かなり以前にロドスとアテナイから追放され、アテナイ民会によっては彼の親族もろとも死刑判決を受け、現在はトゥリオイ市民となっていた	説明
				20	コノンはサモスに到着し、艦隊を引き継ぐ→かつては100隻以上あったが、それに代えて70隻に乗員を乗り組ませる→他の將軍と共に出航させ、敵の各地を荒らし回る	説明

1	5	406	この年	21	この年も終わった→この年はカルタゴ人が120隻の船と12万の歩兵を率いてシケリアに侵入し、戦闘には敗れたが、アクラガスを7ヶ月包囲して兵糧攻めにして占領した	説明
				1	翌年、この年には月蝕がある日の夕刻に起こり、アテナ女神の古い神殿が焼けた→スパルタではピテュアスが監督官、アテナイではカリアスがアルコンであった→リュサンドロスの任期が切れたのでカリクラティダスを艦隊指揮官のために派遣した	説明
				2	リュサンドロスはカリクラティダスに艦隊を引き渡す際、自分は海洋の覇者、海戦の勝利者として引き渡す、と言った→カリクラティダスはリュサンドロスに、エフェソスから沿岸沿いにサモスの左を航行してミレトスに行って艦隊を引き渡すなら、覇者であったことを認めよう、と言った	説明・間接話法 による会話
				3	リュサンドロスは、人の指揮に干渉したくはないと言った→カリクラティダスは引き継いだ船の他、キオス、ロドスおよび他の同盟国の艦船50隻に彼自身が人を乗せた→全140隻を率いて敵軍に当たった用意を調べた	説明・間接話法
			カリクラティダス・リュサンドロスから艦隊を引き継ぎ、指揮権を確立	4	しかしリュサンドロスの友人たちが自分に対する非難活動を行っているのを知った→仕事を熱心に行わないばかりでなく、ボリスに次のような考えを広めていた→ラケダイモン人は艦隊指揮官の交代に間違いを犯した→しばしば指揮官は不適当であり経験もない、人の活用法も知らない等→カリクラティダスは居合わせたラケダイモン人を召集して言った：	説明・間接話法
1	6	406		5	カリクラティダスの演説	弁論
				6	この演説に対し本国からの命令に従い、なすべきことをなすべきであるという以外誰も何も言わない→そこでキュロスの下に赴き、海兵に対する給与をくれるよう言う→キュロスは2日間待つように答える	説明・間接話法
				7	カリクラティダスはそれに苛立ち、ギリシア人はとても悲惨な状況にある、金のためにバルバロイに諂わないといけないのだらうと言いい、故国に無事に帰ったら全力を尽くしてアテナイ人とラケダイモン人とを和解させると言った→ミレトスに去った	説明・間接話法

			軍資金を求めてラケダイモンに三段櫓船を派遣→ミレトス人を召集して以下のように語る：カリクラティダスの演説	説明・弁論
8			カリクラティダスの演説	弁論
9			カリクラティダスの演説	弁論
10			カリクラティダスの演説：バルパロイに彼らの助けがなくとも敵に報復できることを示してやろう	弁論
11			彼がこう言うと、多くの者、特に彼を非難していた者たちは恐怖に陥る→軍資金の調達を申し出、私財からも寄付をする→カリクラティダスはこれを受け入れ、各海兵5ドラクマを旅費としてキオスから確保し、敵国であるメテュムナへ向かう	説明
12			メテュムナ人は彼の方につこうとしなかったので、武力によってこの都市を取った	説明
13			兵士たちは彼らの財産をすべて掠奪→カリクラティダスは捕虜全員をアゴラに集めた→同盟諸国はメテュムナ人も売り払えと言ったが、彼は自分が指揮をとっている限りギリシア人を売り渡すことはいらないと言った	説明・間接話法
14	1	6	翌日、彼は自由人は解放したが、アテナイ人守備隊と奴隷は売却した→コノンには海との姦通は止めさせると通告→彼が夜明に出航するのを見ると、追跡に乗り出し、コノンがサモスに逃げ込めないようその海路を切斷しようとした	説明・間接話法
15			メテュムナ人は彼の方につこうとしなかったので、武力によってこの都市を取った	説明
16			コノンは、多くの船員の中から最高の漕ぎ手を選出して数隻の船に乗り込ませて高速となった船でミュティレネに逃れようとした→10人の將軍の内レオンとエラシニデスが彼と行動を共にした→カリクラティダスは170隻の船で追跡して港内に入った	説明
17			コノンは市民に妨げられる→港の近くで戦うことを余儀なくされた→30隻を失う→乗組員は陸に逃げた→残りの40隻を城壁の下に引き揚げた	説明
18			カリクラティダスは港に停泊し入港を監視下において都市を包囲した→陸上ではメテュムナ軍全軍を召集し、キオスから軍を呼び寄せた→そして、キュロスからの金が届いた	説明

1	6	406	コノンをミュティレネに包囲、アテナイ側の対応	19	コノンは陸海から封鎖された→食糧はどこからも供給されず、多くの人間が都市にいた→アテナイ軍も事態を知らず救援に來ない→2隻の最も高速な船を下ろし、夜明け前に人を乗り組ませた→すべての船から最良の漕ぎ手を選出→乗り組み重装兵を船倉に乗せ、側面に防禦幕を張らせた	説明
				20	彼らはその状態を日中の間続け、夕方暗くなると下船させた→敵たちが自分たちが何をしているかわからないようにした→5日目、適度な食糧を積んで、真昼間封鎖側が監視を緩め、ある者たちが眠ってしまおうと港から出港した→1隻はヘレスポントスを、もう1隻は大海を目指した	説明
				21	朝食をとっていた監視兵はそれに気付き、急いで海に出た→大海に出ようとした船を追跡し、日没時には追いついた→戦いに勝利すると、乗員と共に曳航して陣に戻った	説明
				22	しかし、ヘレスポントスに向かった船は逃げ切り、アテナイに到着して、情勢を報告→ディオメドンがコノン援助のために12隻の船でやって来てミュティレネ海峡に停泊	説明
				23	カリクラティダスが彼の艦隊を急襲して10隻を捕獲した→ディオメドンは自らの船ともう1隻とで逃げ切った	説明
				24	アテナイ人は事態を知ると、110隻の船に自由人であれ奴隷であれ壮丁の全員を乗船させた→110隻に30日間かけて兵員を乗り組ませると出航した→多くの騎兵も乗り組んでいた	説明
				25	その後、サモスに向かい、そこでサモスの船10隻を足した→また30隻以上を同盟国から集めた→全員を強制して乗船させ、国外にたまたまたあった船も集めた→すべてで150隻以上となった	説明
				26	カリクラティダスは救援軍がすでにサモスに着ていることを知ると、エテオニコス麾下に50隻を残し、120隻を率いて出航し、夕食をマレア岬で取った	説明
				27	その日アテナイ側もアルギヌサイでたまたまた夕食を取っていた	説明

			28	夜カリクラティダスは火を目にし、アテナイ人と知らせる者たちがいたので、急襲をかけるため夜中に海に出ようとした→しかし、豪雨と雷のために出撃は妨げられた→それが収まると、夜明にアルギヌサイへと向かった	説明
			29	アテナイ軍も出撃した→アテナイ軍の布陣	説明
			30	アテナイ軍の布陣 (続き)	説明
			31	アテナイ軍がこのような布陣を取ったのは戦列を突破されぬようとするため→アテナイ船の方が遅かったからであって→ラケダイモン側は横1列になったが、戦列突破と回り込みのためであった、ラケダイモン側の方向が船足が速かったからである→右翼を担ったのはカリクラティダス	説明
			32	メガラ人ヘルモンの退却忠告→カリクラティダスは退却は恥ずべきこととして退ける	説明・間接語法
			33	その後両軍は長時間にわたって戦った、最初は密集して、その後は散開して→カリクラティダスは敵艦に衝突した際に海中に落ちて見えなくなつた→プロトマコスら右翼にいた者たちが敵の左翼を打ち破る→それを契機にペロポネソス側がキオスへ逃走し始める→大部分はフォカイアに逃れる→アテナイ側はアルギヌサイに戻る	説明
			34	アテナイ側の損失は25隻とその乗員、ただし陸に揚げられた少数者を除いて→ペロポネソス側は、ラコニア艦船10隻の内9隻と同盟国艦船60隻以上	説明
			35	アテナイ軍将軍は、三段櫓船長のテラメネスとトラジュプロスを47隻の船と共に航行不能となった船と乗員を助けるよう派遣することを決議→自分たちは残りを率いてミュティレネのエテオニコス麾下の艦隊を目指して出撃することに→しかし、風と嵐が強くなりそれが出来なかった→戦勝碑を建てそこで宿営した	説明
			36	エテオニコスに海戦のことすべてが伝えられた→連絡船に黙って出て行くように、そしてすぐに冠をかぶって、カリクラティダスが勝利した、アテナイ艦隊は敗れたと叫びながら戻ってくるよう言った	説明・間接語法

1	6	エテオニコスの対応とその後	37	彼らが命令通りにすると、彼は朗報に供儀を捧げる→軍に食事を取るように、商人には商品を静かに船に乗せキオスへ向かうよう、三段艦船は全速力で航行するよう命令	説明
			38	彼自身は陣営を焼いた後歩兵を率いてメテュムナへ向かった→コノンは、敵が去り風が静まると艦船を海に下ろしアテナイ艦隊と出合い、エテオニコスの行動を伝えた→アテナイ艦隊はミュレイレネへ、そこからキオスへ向かったが何も得るところなくサモスへ戻った	説明
			1	アテナイ本国にいる者たちはコノン以外の將軍を解任→アディマントスとフィロクレスをコノンに加える將軍として選出	説明
			2	海戦に参加した將軍の内プロトマコスとアリストゲネスはアテナイに帰らなかった→6人（ペリクレス、ディオメドーン、リュシアス、アリストクラテス、トラシユロス、エラシニデス）がかえると民衆派のリーダーで2オボロス基金を委託されていたアルケデモスがエラシニデスに罰金を科した上訴える→ヘレスポントスから公金を受け取っているとの理由→彼はまたエラシニデスの將軍としての活動に関しても訴えた→法廷はエラシニデスを拘禁することを決議	説明
			3	その後、將軍たちが評議會で海戦と嵐の大きさについて語った→ティモクラテスが、他の將軍たちも捕らえて民会に引き渡すべきだと提案した→評議會は拘束した	説明・間接語法
			4	その後、評議會が開かれ、特にテラメネスは將軍たちは難破した船の乗員を引き揚げなかったことを説明すべきだと非難した→証拠として將軍たちが評議會と民会に送った書簡を示した→そこには、嵐だけが原因であるとしていた	説明・間接語法
			5	將軍たちは各人自己弁明→自分たちは敵に向かつて船を進め、漂流者の救助は三段艦船長の内で有能で、過去の將軍経験者たち、テラメネスやトラシユプロスにまかせた	説明・直接語法
			6	救助に關して非難するとすればその任務を受けた者たち以外にない→しかし、われわれは彼らを訴えているからといって彼らに責任があるなどと言うつもりはない、嵐の大きさが原因なのだ→それについて多くの証人を立てる→彼らの議論が民会を説得しつつあった	説明・直接語法

1	7	406	アルギスサイ海戦 後のアテナイの状 況・・・将軍裁判	7	多くの私人が立ち将軍たちの保証人になろうとす→しかし、次の会 で延期することが決定された→もう遅く、拳手の手が見えなかつた→ま た、評議会がどのようにに彼らが判決されるか先議しておくことが決せら れた	説明
				8	その後、アパトゥリア祭が祀られる→父親と親族が一堂に会す→テラ メネス一派は、多くの人間に黒衣を着せ髪を短く刈り込んで、戦死者の 親族として祭りに出席させた→カリクセノスを説得して将軍たちを評議 会で告発させた	説明
				9	民会が開かれ、評議会はカリクセノスが提案した以下のような提案をす る→将軍たちに対して部族ごとに投票すべき、と	説明・直接引用
				10	もし彼らが有罪なら死刑に処し11人に引き渡す→財産は没収し、その10 分の1をアテナ女神に捧げる	直接引用
				11	或る男が民会にやってくる、自分は穀物の樽に捕まって助かった、死に つつあった者がもし君が生き残ったら、将軍たちは最も勇敢に国のため に戦った者を救出しようとしなかったと人々に伝えてくれと言が残した、 と伝える	説明・間接話法
				12	エウリュプトレモスとその他の者たちはカリクセノスが違法提案をした として彼を召喚→ある者たちはその行為を認めたが、大部分は「民衆が 望むことをなすのを許さない者がいるとしたら恐るべきことだ」と叫ん だ	説明・間接話法
				13	リュキスコスが、召喚命令を引っ込めないならその者たちも将軍と同様 に裁かれるべきだ、と言うと、民衆は再び大声を上げたので、召喚命令 を引っ込めざるを得なかった	説明・間接話法
				14	当番評議員の幾人かが違法な票決に反対したが、カリクセノスは再び登 壇して、彼らに同じ告発を行う→人々はこれを拒絶する者を召喚せ よと叫ぶ	説明・間接話法
				15	当番評議員は恐怖に駆られ、ソクラテスは法にしたがって行動する以外を拒絶した 賛成した→ソクラテスは法にしたがって行動する以外を拒絶した	説明

16	エウリュプトレモスの演説	棄論
17	エウリュプトレモスの演説	棄論
18	エウリュプトレモスの演説	棄論
19	エウリュプトレモスの演説	棄論
20	エウリュプトレモスの演説	棄論
21	エウリュプトレモスの演説	棄論
22	エウリュプトレモスの演説	棄論
23	エウリュプトレモスの演説	棄論
24	エウリュプトレモスの演説	棄論
25	エウリュプトレモスの演説	棄論
26	エウリュプトレモスの演説	棄論
27	エウリュプトレモスの演説	棄論
28	エウリュプトレモスの演説	棄論
29	エウリュプトレモスの演説	棄論
30	エウリュプトレモスの演説	棄論
31	エウリュプトレモスの演説	棄論
32	エウリュプトレモスの演説	棄論
33	エウリュプトレモスの演説	棄論
34	エウリュプトレモスは、カンノソスの決議に従って將軍たちが個別に裁かれるべきことを提案→評議会は全員1回の投票で裁くことを提案→民会はこの2つの提案を投票→最初はエウリュプトレモスの提案が採られる→メネクレスが誓いを立てて反対するともう一度投票がなされ評議会の提案が採られた→その後8人の將軍たちは有罪とされ、そこにいた6人は処刑された	説明

		35	その後、アテナイ人は後悔して、アテナイ民会を欺いた者は告発されるべし、裁判を受けるまで保証人を立てるべし、カリクセノスもその一人たることを投票決議→さらに4人が告発され、保証人によって彼らは拘束された→しかし、後に内乱が起こると、彼らは裁判の前に逃れた→カリクレスはペイライエウス派とアテナイに戻った時、皆に憎悪され戦いで死んだ	説明
		1	キオスにあったエテオニコス麾下の軍の状況→夏はともかく冬になると食べるものが無くなり、互いに都市キオスの襲撃を申し合わせる→賛成の者は葦を持つように、それによってどれくらいいいかわかるだろう、と考えた	説明
		2	エテオニコスはこの策謀を察知したが、葦を持つ者が多いためにどうしたらいいかわからなかった	説明
	エテオニコス・・・キオスで部下の策謀を押さえる	2 1 406	短剣を持った15人を連れて町を巡回している時、目の悪い者が医者から出て来るのに会い、葦を持っていたので殺してしまった	説明
		4	騒ぎが起こる→なぜこの男が殺されたのか聞く者がいた→エテオニコスは葦を持っていたからだと答えるように指示→この指示のため葦を持っている者は皆投げ捨てていった	説明・間接話法
		5	その後、キオス人を集めて金を差し出すように命ずる→海兵に給料を与え反乱しないようにするため→キオス人は金を差し出した→同時に海兵に乗船命令を出す→各船を訪ねて、企みを知らぬ風を装い、さまざまに督励して給料を渡した	説明
		6	その後、キオス人とその他の同盟国人はエフェソスに集まり現状について協議→ラケダイモンに使節を送り現状を報告し、リュサンドロスを艦隊司令官に任命されるよう頼むこととした→先のノティオンの戦いに勝利した艦隊司令官の際に同盟国から好評を得ていた	説明
	リュサンドロスの呼び戻し	2 1 406	使者が送られ、同時にキュロスからの使者も同じ要求を携えて同行した→ラケダイモン人は、リュサンドロスを副官として、アラコスを司令官として送った→同じ者が二度艦隊を指揮することを禁ずる法があったから→リュサンドロスを艦船を引き渡した→戦争が25年経過した	説明

2	1	406	この年、・・・ペルシア内部の動き	8 この年、キュロスはダレイオスの姉妹の息子、アウトボイサイケスとミトライオスを殺した→彼らがキュロスを迎えた際コレーに手を差し入れることをしなかったから	説明
				9 ヒエラメネスとその妻がダレイオスに訴え、大王は病気を理由にキュロスを呼び寄せる	説明・間接話法
				10 リュサンドロスはエフエソスに到着するとエテオニコスとその艦隊をキオスから呼び寄せ、その他の艦船もすべて集結させた→アンタンドロスでそれらを修理し、新たなものも作らせた	説明
				11 キュロスの下において軍資金を要請→キュロスはこれまで多くの金が使われたことを示したが、金はくれた	説明・間接話法
2	1	405	リュサンドロスとキュロス	12 リュサンドロスは金を受領すると、各三段権船指揮官を任命し、海兵に未払いの給料を支払った→一方、アテナイの將軍たちもサモスで海軍の準備を整えていた	説明
				13 キュロスの元に父王から呼び出しがあった→キュロスはリュサンドロスを呼びにやった	説明
				14 リュサンドロスが来ると、キュロスは船の数がはるかに勝つようになるまでアテナイ海軍と戦うことを禁じた→大王も自分もたくさんの金を持つていて、多くの船を作るのだから→彼が個人的にポリスから得ている貢租をリュサンドロスに割り当て、残っている金も与えた→自分がラケダイモンにもリュサンドロス個人にも如何に友情を持っているかを思い出させた	説明
				15 リュサンドロスは、キュロスが去ると、軍隊に給料を払い、カリアのケラメイオス湾を目指して出航→ケドレイアイというアテナイ同盟ポリスを攻撃→都市を占領し住民を奴隷とする→その住民は半バルバロイであった→そこからロスへ立ち去った	説明
2	1	405	リュサンドロスとアテナイ軍の動き	16 アテナイ人はサモスを拠点として出撃し、ペルシア王の領土を荒らし、キオスとエフエソスへ出撃した→海戦に対する準備を整えた→すでにある將軍に加えて3人を將軍に選出	説明

			17	リュサンドロスはロドスを出てヘレスポントスへ向かう→穀物船を妨げ、ペロポネソス側から離反したボリスを従わせるため→アテナイ軍もキオスに向かう→アテナイは沿岸沿いの航路ではなく大海を通った	説明
			18	リュサンドロスは、アビュドスからアテナイの同盟国ランブサコスへと向かった→陸上ではアビュドス軍とその他の同盟国軍がトラクス麾下並行して向かっていた	説明
2	1	405	19	ランブサコスを攻略→リュサンドロスは自由人を解放	説明
			20	アテナイ軍はリュサンドロスの後を航行し、ケルソネソスのエライウスに180隻を停泊さす→朝食をとっている際ランブサコスのことが知らされたので即座に出港してセストスへ向かった	説明
			21	そこで食糧を調達して、ランブサコスの対岸アイゴスボタモイに向かった→そこで夕食を取った	説明
			22	夜になり、夜明け前にリュサンドロスは朝食をとり、乗船するよう合図した→海戦の準備を整え、防禦幕を張り、誰も持ち場から離れてはならないし、海に出てもならないと告げた	説明
			23	アテナイ軍は、夜明けと共に、港の前で海戦のために戦列を敷いた→しかし、リュサンドロスが出撃してこず、日も遅くなったのでアイゴスボタモイに戻った	説明
			24	リュサンドロスは、最も船足の速い船でアテナイ軍を追跡させ、敵が上陸した後何をするかを監視して報告するよう命じた→この船が戻るまで海兵を下船させなかった→同じことを4日間続けた→アテナイ軍も4日間これに應じて船を出した	説明
			25	アルキビアデスは城塞からこれを見て忠告→アテナイはセストスから食糧を運んでいるが、ペロポネソス軍は港にあって町の近くだからあらゆるものを持っている→アテナイ軍はセストスの港内へ移動すべき→そこにいれば好きな時に海戦が出来る、と言った	説明・間接話法 による会話
2	1	405	26	将軍たち、とりわけテュデウスとメナンドロスは、現在将軍であるのは自分たちであるからと彼に立ち去るように命じる→アルキビアデス、立ち去る	説明・間接話法 による会話

				27	5日目にアテナイ軍が出港すると、リュサンドロスは部下にアテナイ軍が上陸し散開したら、自分の元に戻り、途中で橋で合図せよと命じた→彼らは命ぜられた通りにした→アテナイ軍は日々ますます散開するようになつていった、食糧を遠くから調達していたし、リュサンドロスが打つて出ないため彼を軽蔑していたから	説明・間接話法
				28	リュサンドロスは、ただちに全速航行の合図を下す→トラクスもそれと共に歩兵を率いて行進→コノンはこれを見ると乗船の合図を下す→しかし、乗員は散開しており、ある船は2列、ある船は1列しか兵員がおらず、中にはまったく乗員のいない船もあった→コノンの船とその他バラロス号を含む7隻は乗員が揃っていたので海に出る→リュサンドロスはその他すべての船を岸近くで捕獲→ほとんどの乗員を陸で捕獲した、しかし、ある者は小さな城塞に逃げ込んだ	説明
				29	コノンは9隻と共に逃れたが、アテナイのすべてが失われたことを悟った→ランブサコス先の岬アパルニスに寄りリュサンドロスの帆を奪った→8隻の船と共にキュプロスのエウアゴラスの下に逃れた→バラロス号はアテナイに向かった	説明
				30	リュサンドロスは船、人員その他すべてをランブサコスへと運行していった→將軍のフィロクレレスとアデイマントスが含まれていた→ミレトス人の海賊テオポネボスをラケダイモンに報告に行かせる→3日目に到着し報告する	説明
2	1	405	戦い後のこと	31	その後、リュサンドロスは集会を召集し、捕虜について討議させる→アテナイ人に対する多くの告発がなされる→慣習や法に反してすでになされた行為、海戦に勝利した際右手を切り落とすと投票決議したことに関して→コリントスとアンドロスの三段櫓船を捕まえた際、乗員を海中に突き落としたことについて	説明
				32	アデイマントスを除いてアテナイ人捕虜は全員死刑とされた→彼は捕虜の右腕切断の決議に一人反対したかという理由→しかし、彼が艦隊を裏切ったことを告発する者もあった→リュサンドロスはフィロクレレスにギリシア人に対し慣習に反したことをなしたこととに相応しいことは何であらう、と問うた後彼の喉を切った	説明・間接話法

2	2	405	リュサンドロスの動き	1	リュサンドロスはランブサコスでの問題を片付けると、リュザンティオンとカルケドンに向かった→市民は彼らを受け入れたが、アテナイ人の守備隊は休戦協定を結び逃げていた→アルキビアデスが自国を売り渡したリュザンティオン人は黒海に逃れ、後にアテナイに逃れた→アテナイでアテナイ市民となる	説明
				2	リュサンドロスはアテナイ人守備隊と見つけたその他のアテナイ人をアテナイへ送った→彼らにはアテナイに行く時のみ安全を保証した→アテナイとペライエウスに人が多くなればなるほど早くに食糧が不足するだろうことを知っていたからである→リュザンティオンとカルケドンの統治官としてラコニア人ステネラオスを残して、リュサンドロスはランブサコスに戻り、そこで船を修理した	説明
2	2	405	アテナイの状況	3	バラコス号が夜アテナイに着き、災禍が報告されると、嘆きの声がペライエウスから長壁を通して都市に達した→誰も眠らなかった、死者を悼んだだけでなく、自分自身を悼んだ→自分たちが誤ったのと同じ打ちが自分たちに加えられるだろうと思っただからである→つまり、メロス人、ヒステイアアイア人、スキオネ人、トロネ人、アイギナ人、その他の多くのギリシア人になしたと同じこと	説明
				4	翌日アテナイ人は集会を開き、1つを除いて港を閉鎖すること、城壁を修繕し守備隊を置き、その他あらゆる方策を用いて包囲戦のために準備することを決議→こうした仕事に専念した	説明
				5	リュサンドロスは、200 隻の船を率いてヘレスポントスからレスボスに到着→その他のポリスとミュティレネを制圧→トラキアへ10 隻の船と共にエテオニコスを派遣→エテオニコスはそのすべてをラケダイモン軍に転換するようにした	説明
				6	海戦後サモスを除いてすべてのギリシアがアテナイに離反した→サモスではサモス人が貴族を殺した後ポリスを支配していた	説明
2	2	405	スパルタ側の動き	7	リュサンドロスは、デケレイアのアギスとラケダイモンに200 隻の船を率いて進軍すると知らせた→ラケダイモン軍はアルゴスを除くその他のペロポネソス同盟軍と、もう一人の王パウサニアス指揮下に出撃した	説明

			8	全軍が集結すると、王は全軍をアテナイへと率いて行き、アカデメイアで宿営した	説明
			9	リュサンドロスはアイギナに到着すると、出来るだけ多くのアイギナ人を集めて彼らにボリスを返した→メロロス人やその他のボリスを奪われた者たちに対してでもそうした→その後サラミス島を荒らし、ペイライエウスの前に150隻の船を停泊させ、船が入港するのを妨げた	説明
			10	陸海から封鎖され、船も同盟も食糧もなく、アテナイ人は何をして好いかわからなかった→自分たちが報復からではなく、単に敵と結んだということだけで小さなボリスの人間に傲慢から下した不正を、今度は自分たちが被ることになるのはもはや避けようがないと、彼らは考えていた	説明
			11	市民権を剥奪された者たちの地位を回復させたが、餓死者が出ても和平について協議しようとしなかった→しかし、食糧が完全に尽きると、使者をアギスの下に派遣して、城壁とペイライエウスを保持しつつラケダイモンの同盟国となる、その条件なら和平を結ぶ、と伝えた	説明
			12	アギスは、自分にはその権限がないから、ラケダイモンへ行くよう告げる→使節がアテナイにそれを報告すると、彼らはラケダイモンへの使節に命じられた	説明・間接話法
		405	13	使節団がセラシニア来ると、監督官は彼らがアギスの対するのと同じ申し出をすることを知り、ただちに帰るよう命ずる→監督官は、もし和平を望むのであれば、もっとよく協議してから来るべきだと言った	説明・間接話法
			14	使節団が戻って報告すると、大きな失望が全員を襲った→彼らは奴隷に売られると思った、他の使節を送るとしても多くの餓死者がその間に出るだろうと思った	説明
			15	誰も城壁の破壊を言おうとするものはいなかった→アルケストラトスが評議会でラケダイモン人の要求する条件で和平を結ぶのが最善策だと言って拘束されたから→ラケダイモンは大城壁の両端10スタディオンを破壊することとを要求していた→こうしたこととを協議することを禁ずる投票決議が成立した	説明

2	2	アテナイ降伏	16	こうした状況下でテラメネスが民会で、自分をリュサンドロスのもとに派遣するのなら、ラケダイモンが城壁について言うのはアテナイを奴隷化するためか信義の確認のためか見定めてこうと言う→彼は派遣されたが、リュサンドロスの下に3ヶ月以上も滞在した→アテナイが食糧欠乏のため如何なる条件にも合意するようになるのを待っていた	説明・間接話法
			17	4ヶ月目に帰ってきて、民会に報告した→リュサンドロスは自分を今まで引き留めていたが、結局ラケダイモンに行けと言った、彼は権限を持たず、監督官が権限を持っているのだ→その後、テラメネスはラケダイモンへの全権を持つ使節の10人の1人に選ばれた	説明・間接話法
		405/4	18	リュサンドロスは、アテナイ人亡命者アリステレスを何人かのラケダイモン人と共に派遣して監督官に、テラメネスに対して権限を持つのは監督官だと答えた、と伝えさせた	説明・間接話法
			19	テラメネスらがセラシアに到着し、如何なる理由で来たかを問われると、和平に関し全権を委ねられてしていると答えた→その後監督官は使節団を召喚するよう命ずる→使節団が来ると、多くのギリシア人、とりわけコリントス人とテバ人がアテナイと和平を為すべきでない、破壊すべきだと主張	説明・間接話法
			20	ラケダイモン人は、ギリシア最大の危機に際し大きな貢献をした国を奴隷化することを拒否→次の条件で和平を提案：城壁とペイライエウスの破壊、12隻以外の船の引渡し、亡命者の帰国、ラケダイモンと同じ友人、敵を持つこと、陸海共にラケダイモン人の指揮に従うこと	説明・間接話法
			21	テラメネス一行がその提案を持ちかえる→多くの群衆が取り囲んだが、何も成果を得ず戻ったのではないかと恐れたからである→餓死者が多く一刻の猶予もなかったからである	説明
		404	22	翌日使節団がラケダイモンの提案を説明→テラメネスは、ラケダイモン人に従い城壁を破壊すべきと発言→反対する者もいたが、はるかに多くの者が賛成→和平受諾を決議	説明・間接話法
			23	その後、リュサンドロスがペイライエウスにやって来、亡命者が帰国した→彼らは笛吹き女の音楽に合わせて熱心に城壁を壊し始めた→この日から自由なギリシアが始まると考えながら	説明

2	2	405/4	この年	24	この年が終わる→シュラクサイのディオニシオスが僭主の地位に就く、カルタゴ人がアクラガスを取った	説明
2	3	404/3	新年	1	翌年：スパルタではエウデイオスが監督官、アテナイではピュトドロスがアルコンであったが、寡頭政下で選出されたのでアテナイ人はこの年を彼の名にちなんで呼ばず、アルコン不在の年と呼んでいる	説明
2	3	404	三十人	2	民会で30人を選び、その者たちが父祖伝来の風になつた法を起草することになった→30人の名前	説明
2	3	404	スパルタの対応	3	こうした措置がとられた後、リュサンドロスはサモスに向けて出航、アギスはデケレイアから歩兵部隊を撤回し、故国に帰らせた	説明
2	3	404	テッサリア	4	この時期の日蝕のあった頃、フェライイ人のリュコフロンがテッサリアを支配しようとして敵対するラッリサ人その他を戦争で屈服させる	説明
2	3	404	シチリア	5	同じ頃、シュラクサイの僭主ディオニシオスはカルタゴ人との戦いで敗北しゲラとカマリナを失う→シュラクサイ人の下に住んでいたレオンティノイイ人が離反し、故国に帰ってしまふ→シュラクサイ人騎兵隊がカタネへと派遣される	説明
2	3	404	サモス	6 7	サモスがリュサンドロスに降伏する リュサンドロスはかつての市民にサモスを委ね、10人の統治官を残して去る	説明 説明
2	3	404	リュサンドロスのスパルタ帰還	8 9	リュサンドロス、スパルタに帰還する 夏の終わりにすべてをスパルタに引き渡した	説明 説明
2	3		この年まで	10	これまでの監督官の名前	説明